# のんびり

15 non-biri

2015 Winter




ユタカな国へ あきたびじょん

AKITAVISION

TAKE FREE




のんびりしたいは
みんなのきもち
のんびりできるは
ゆたかなあかし
のんびりまっすぐ
秋田のくらし

秋田にはうまい飯とうまい酒があります。
その豊かさが
秋田の実直なものづくりを支えてきました。
そして同時に、秋田の人々のなかには
大らかで力強い
「のんびり」精神が育まれました。

そんなのんびり秋田は
右肩上がりな経済成長という
ゴールなきゴールに向かい
懸命に走ってきたニッポンにとって
まるでビリを走るランナーのように
映っていたかもしれません。
けれど世の中は変わりました。

順位など気にせずのんびり歩いてきたことが
まさに「ノンびり」となる時代がやってきました。
日本人の多くは今、
うまい飯が食べられてうまい酒が飲めるという
当たり前の豊かさについて考え直しています。
しかし秋田では昔も今も、ずっと
それが人々の暮らしの真ん中にありました。

ビリだ一番だ。上だ下だ。と
相対的な価値にまどわされることなく
自分のまちを誇りに思い、他所のまちも認め合う。
そんなニッポンのあたらしい〝ふつう〟を
秋田から提案してみようと思います。

のんびり編集部

表紙の撮影場所

# たざわこ芸術村 わらび劇場



## 為三（ためぞう）さ〜ん!!!

今号の表紙は、特集テーマでもある「劇団わらび座」にちなんでの撮影です。撮影の舞台となる「わらび劇場」では、ミュージカル「為三さん！」が上演中。『のんびり』12号でも特集した、秋田出身の作曲家、成田為三さんの物語です。

まずは、今回の撮影のモデルとなる、北秋田市立合川（あいかわ）小学校の児童たちや、県内外から集まってくれたみなさんとともにこのミュージカルを観劇。そして、終演後の興奮冷めやらぬなか、すぐさま撮影に移ります。

ここからは観客のみなさんが主役。カーテンコールでスタンディング・オベーションしている光景を、ステージの役者さんの目線から撮影するのです。先ほどの感動の気持ちをいっぱいに込めて、「為三さ〜ん！」の掛け声とともに、みんなでカラフルなハンカチを思いっきり振ります。

撮影が始まると、上演直後ということもあり、みんなハイテンション！　カメラを前に、役者さながらの最高の表情を見せてくれます。のんびり史上最多人数の撮影に、不安いっぱいののんびりチームでしたが、みんなの笑顔と、わらび座のみなさんの手厚いサポートのおかげで、撮影は大成功に終わりました。

そんな表紙撮影の様子は「のんびり公式ウェブサイト」でご覧いただけます！

『のんびり』表紙写真ができるまで。写真家浅田政志と奮闘したその過程を公開中！　http://non-biri.net


















# 目次


1 のんびりまっすぐ秋田のくらし

4 **おらだのわらび座。おらだの光。おらだのエンターテイメント。**

6 第1章 **わらび座noイメージ**

14 第2章 **わらび座の使命**

22 第3章 **民族芸能を体感する。**

28 第4章 **奇跡の夜**

34 第5章 **僕たちにできること**

40 最終章 **涙のフィナーレ**

46 **ちょうどいいかんてん**
第3回／つむぎやさんとにかほ市

51 **下戸式秋たんぼう 福田利之**
第15回／百花繚乱ラーメン宇宙県

56 **畑のキャビア!? とんぶりってなに?**

62 **non-biri akita access map**


秋田で暮らす美しき人々
＝あきたびじん

## 今号の「あきたびじん」ぶつ相関図



# おらだのわらび座。おらだの北光。おらだのエンターテイメント。

取材・文＝藤本智士
Text＝Satoshi Fujimoto
写真＝浅田政志／鍵岡龍門／船橋陽馬
Photo＝Masashi Asada/Ryumon Kagioka/Yoma Funabashi

普段は兵庫県に住む僕が秋田県に訪れては取材を繰り返し、本誌の制作を進めていくなかで、常に意識していることは「よそ者の役割」です。その土地に新しい風を吹かせる役割を担っていると自覚する僕は、秋田で暮らす人には当たり前過ぎてその良さに気付かないもの、秋田にいるからこそ、かえってわかったような気になってしまっているもの、そんな事柄に注目してこの『のんびり』を作ってきました。そうやって約4年、14冊も『のんびり』を出しているとさまざまなことが起こるものですが、そんなかなかでも、特に気になっていたことがありました。

2013年末発行の、『のんびり』7号で「理紀之助（りきのすけ）が教えてくれる本当の経済」と題し、秋田の偉人、石川理紀之助について特集をしたときのことでした。その直後に、偶然にも「リキノスケ、走る！」という石川理紀之助を題材にしたお芝居が秋田で上演されました。そのタイミングの良さに驚いた僕は、こんなこともあるんだな～と不思議に思っていたのですが、さらにその1年後の2015年春、『のんびり』12号で「たのためぞ～成田為三（なりたためぞう）が伝えたかったこと～」という秋田生まれの作曲家の特集を組んだその直後に、またしても秋田で「為三さん！」という成田為三の生涯を描いたお芝居が上演されたのです。

先述のとおり、よそ者の役割について日々考えながら『のんびり』の編集に取り組む僕にとって、この出来事は単なる偶然のようには思えませんでした。もちろん、お芝居を上演するというのは、脚本、演出、お稽古、さまざまな制作含め、とても手間と時間がかかるものです。『のんびり』を見てから演目を決めたなんてことはありえません。つまり、ほぼ同時に同じ題材に注目したということ。僕はその着眼に僕と同じ、よそ者の意識を感じました。しかしです。それらを上演した劇団の名前は「劇団わらび座」。なんとも土着的な匂いのするその劇団が、僕のようなよそ者であるとはおよそ思えませんでした。

さて、今号の特集は、そんなきっかけから知ることとなった、劇団わらび座をめぐる物語です。僕たちの想像を遥かに超えて、まるでわらび座の舞台のごとき感動のフィナーレへと突き進む取材にどうか今号もお付き合いください。日本のエンターテイメントの確かな未来がここ秋田にありました。

のんびり編集長　藤本智士（Re:S）

# 第1章 わらび座ものがたり

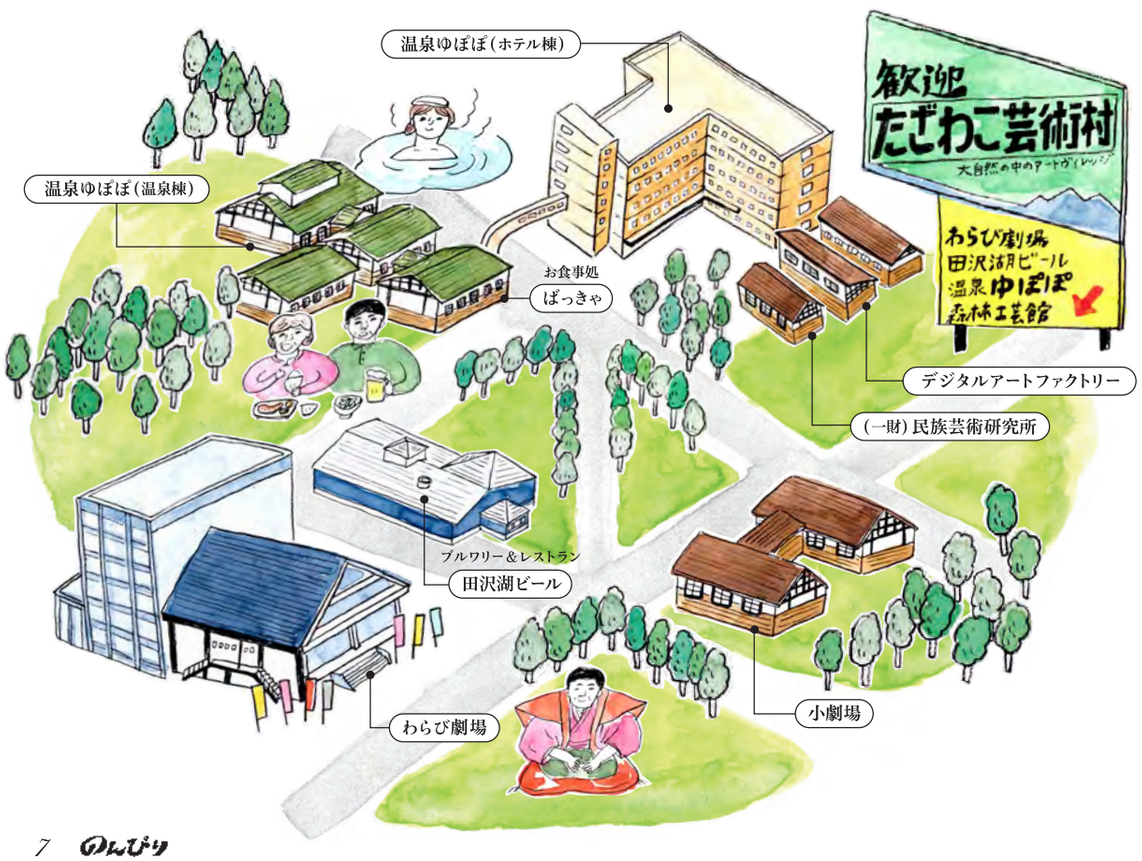
## はじめてのわらび座

序文で書いたとおり、『のんびり』特集とわらび座公演との絶妙なリンクに、いよいよわらび座のことが気になって仕方がなくなった僕は、ついに観劇の機会を得ます。２０１５年のある夏の日、僕のもとにとある鼎談の依頼がやってきました。そのお相手の一人が、わらび座社長の山川龍巳さんだと知った僕は、舞台を観劇させていただくことを条件に、その鼎談を引き受けることにしました。そうして訪れた劇団わらび座のホーム、わらび劇場。仙北市という秋田市内から離れた場所にあることや、妙な先入観から、こじんまりとした劇場を想像していたのですが、目の前に現れたのは席数７１０を抱えるとても立派な劇場で僕はびっくりしてしまいます。そのとき、はじめて知ったのですが、なんと、劇団わらび座は国内外で年間約１２００公演を行い、約48万人を動員。劇団四季、宝塚歌劇団に次ぐ規模を誇るというのです。もはや、わらび座に対する僕のイメージはきれいさっぱり消え去りました。そんなまっさら状態で観たミュージカル「為三さん！」。それはそれは素晴らしい舞台でした。

わらび劇場へようこそ
本日の公演は
6時30分開場
10時15分開演
終演は12時20分の予定です
どうぞごゆっくりお楽しみください

## 9月27日

はじめてわらび劇場に訪れた日から約ひと月がたった9月27日。『のんびり』15号特集取材初日。すでに秋田入りしていた僕と秋田チームは秋田市を早朝出発し、東京からやってくる浅田くん鍵岡くんたち写真家チームと角館駅で合流。そこから10分もかからず到着したのは「たざわこ芸術村」でした。見渡す限りの田んぼのなかに、突如として現れるこの村は、劇団わらび座の本拠地として１９９６年にスタートしたエンターテイメントリゾート施設で、わらび劇場のほか、温泉施設の「ゆぽぽ」や、田沢湖ビールのブルワリーやレストランなどが内包され、わらび座観劇のみならず、秋田の食や温泉までもしっかり楽しめる場所になっています。わらび座のことを深く知りたいと今回の特集を決めた僕たちですが、実は秋田チームも含め、わらび座のお芝居をきちんと観たのは、先述の鼎談のために観劇させていただいた僕とアシスタントのはっち（山口）だけ。ということで、わらび座さんがのんびりメンバー全員を「為三さん！」の舞台に招待してくださったのでした。






## ミュージカル「為三さん！」




10時前、わらび劇場に到着した僕たちは、今号の取材におけるさまざまな調整でお世話になっているわらび座広報の管野紀子さんにご挨拶。早速、みんなでミュージカル「為三さん！」を観劇させていただきます。そもそも成田為三さんについては、『のんびり』12号で特集取材済み（のんびりHPでPDF公開中です）。のんびりチームにとっても思い入れの深い成田為三さんの生涯が、ステージでどんなふうに描かれるのか？　のんびりチーム全員とても楽しみな様子。さあ、いよいよ開演です！












## 鈴木裕樹さん　32歳



終演後のみんなの顔は想像通りでした。ここでそのストーリーについては触れませんが、とにかくその感想を伝えるためにも、今回、主役の為三さんを演じる鈴木裕樹（ひろき）さんにお話を伺うことにします。

**藤本**　お疲れのところありがとうございます。

**鈴木さん（以下敬称略）**　いえいえ。あ、なんか、この感じ、見たことあります（笑）。

**一同**　ははは。

**鈴木**　いつも、本当に楽しく読ませていただいています。

**一同**　ありがとうございます！

**藤本**　嬉しい。確か鈴木さんは大仙（だいせん）市出身なんですよね。高校がうちの澁谷と一緒だとか。



**鈴木**　はい、そうなんです。俺の2こ上だと思います。

**澁谷**　俺が3年生のとき、1年生っていうことですか？

**鈴木**　はい。

**一同**　へぇ～！

**藤本**　前に観させてもらったときも『のんびり』12号をこんなふうに置いてくれてて。

**鈴木**　参考にさせてもらってます。

**矢吹**　いや～。嬉しい。

**藤本**　石川理紀之助さんの特集をしたときもそうですけど、当然僕たちはわらび座さんがお芝居やることは知らず。



**鈴木**　あ、やっぱりそうなんですね。

**藤本**　そうそう偶然です。今回の為三さんもそうだし。そこがなんか、おもしろいなあって。

**鈴木**　なんか、目のつけどころが一緒というか。

**藤本**　まずは褒め合います？　そこ。

**一同**　ははは。

**鈴木**　ちょうど稽古中に『のんびり』を見せてもらって。

**藤本**　あ、そういうタイミングだったんだ～。

**鈴木**　いや、ほんとおもしろいです。後藤惣一郎さん（為三さんを尊敬してやまない秋田在住の作曲家）を引っ張り出すところとか。

**藤本**　後藤さんもかなりご年配だし、そういう意味では成田為三が未来に繋がるかどうかの瀬戸際という状態のなかで、こうやって舞台を通して為三さんがまた秋田の人に息づいていくわけだから、これこそ舞台の力だな～って思います。

**鈴木**　やっぱりこの作品は、秋田県以外じゃできないですから。

**藤本**　ほんとに。

**鈴木**　秋田県のみなさんも『秋田県民歌』は知っていても作曲者の名前は知らないっ

ていうのがほとんどですし。ちなみに今回、わらび座を取りあげていただくっていう話になったのは、社長との鼎談があったじゃないですか。

**藤本**　いや、それはね、だからってわけじゃなくて。

**鈴木**　あ、そうなんですか。俺、絶対に社長が根回ししたんだと……。

**一同**　ははは（笑）。

**藤本**　『のんびり』担当の県庁職員のかたが何人かいらっしゃるんですけど、1年ぐらい前からずっと「わらび座さんの特集はどうだろう?」って言われてて。実はこう見えて毎回ちゃんと編集会議をするんですよ。県庁のおじさんたちと喧々諤々。そういうなか、わらび座をほぼ誰も観たことがないのに取り上げるのは逆に不誠実だなと。だから「まずは観なきゃ」って思ってたんです。でもなかなか観に行けてなくて、そこにその鼎談の話があったわけですよ。だから社長の山川さんの根回しじゃないです（笑）。

**一同**　（笑）。

**藤本**　そういうご縁でついに観劇させてもらって、もう、すっげー感動しました。

**鈴木**　あぁ～。

**藤本**　僕は勝手に、誌面だから伝えやすいことと、舞台として伝えやすいことって別だろうと思ってたんです。僕らの作る物は、読み手のペースでじっくり読んでもらえるから、そういう意味で、伝えたいと真ん中の本質を表現しやすいメディアだと思うんですね。特に『のんびり』は一つの特集に何十ページって尺を取るので。一方それがミュージカルになるとき、そこで表現される部分っていうのは、僕たちとは軸が違うって思い込んでたんですよ。

**鈴木**　うん。

**藤本**　だけど「為三さん!」の舞台を観たときに、僕たちが伝えたい！って思っているところのど真ん中がエンターテイメントになっているから、すんげーーーっ！と思った。

**鈴木**　あぁ～～。

**藤本**　そのことにもうめちゃめちゃ感動しました。なのでその足そのままの勢いで、次の特集はわらび座にしたいって県庁の人たちに相談した、っていうのが今日に至る流れです。

**鈴木**　なるほど～。

**藤本**　だけどね、ここにいるメンバーの半分が秋田在住なのに、今日までみんなちゃんとわらび座を観てなかったんです。



**矢吹**　私たち、劇場で観るのは実ははじめてでした。

**藤本**　そういう感じだから、みんなに「わらび座ってどうなの?」って聞いても、何となくふわふわした意見ばっかりで。秋田の人でも、特に若い世代は結構そうなのかなって。

**鈴木**　僕もそうでした。入るまで観たことなかったので。

**一同**　え～っ!

**矢吹**　そうなんですね。じゃあどうしてわらび座に?

**鈴木**　もともと学校の先生になろうと思って大学に通っていて、でもそれが、どうやら自分の一生の仕事にならないなって思って、それが大学4年のときで。

**藤本**　うん。

**鈴木**　気付くのに4年かかっちゃったんですけど。それで学校を辞めて。

**藤本**　うんうん。

**鈴木**　それで次、仕事として何をやっていこうかなと考えたときに、やっぱり自分は本当に好きなことしか続けられないなと。そんな自分が何なら続けられるのかって考えたときに、歌ったり体を動かしたり、それと潜在的に目立ちたいっていうのがあったので、こういう仕事をやろうと。

**藤本**　あ～、なるほど。

**鈴木**　でも、何もやったことがなかったので、とにかく東京に行こうとしたんですけど、周りに止められて。そのときに、地元にわらび座っていうのがあって、そこは入って2年間、研究生として勉強する期間があるって聞いて。それがすごく魅力的で。

**矢吹**　今年で何年目になるんですか?

**鈴木**　研究生を含めて10年目です。

**一同**　お～。

**藤本**　それでこうやって主役をやれるんだからすごいよね～。

**鈴木**　地元の作品なので、やっぱり地元の人間っていうのは強いですよね。

**藤本**　特に「為三さん!」は地元色が強いというか。兵庫県の人間がまさか客席で『秋田県民歌』を歌わされるって、そんなお芝居ないよね。



**一同**　（笑）。

**鈴木**　あの歌う場面になったら、みんないっせいに歌詞が載っているパンフレットを持ってね。実は上から見てるんです。あの場面、僕は出ていないんですよ。

**一同**　あぁ～。

**鈴木**　秘密の部屋で客席をずっと見てて。大きな声で歌う人もいれば、さっぱりな人もいますけど。小学校の子どもたちもよく来るんですけど、普段から学校で県民歌を歌っている子たちが来て、みんなで歌ってくれたときは、ステージ上で役者が感動して涙を流してて。

**一同**　うわぁ～～。

**鈴木**　客席からの反応でステージの役者が感動しちゃう。そんなのふつうないですよね。

**藤本**　なるほどなあ。そもそも僕が住む兵庫県は県民歌があるのかどうかすらわからないし、これだけ県民歌が根付いてる県って、秋田くらいじゃないのかな?

**鈴木**　そうですよね。



**藤本**　鈴木くんって、いま、いくつでしたっけ？

**鈴木**　僕、32です。

**藤本**　うちで言うと（船橋）陽馬ぐらい？

**陽馬**　僕、34ですね。

**鈴木**　それにしても、すごい、大所帯ですね。

**藤本**　でも、わらび座ほどではないよね。のんび座は（笑）。

**一同**　（笑）。

**鈴木**　チームの感じがすごいありますよね。

**藤本**　でも、お芝居こそそうですよね。

**矢吹**　今日観ていたら、一人何役やっているんだろうってくらい、同じ人がいろんなことをしてて。

**鈴木**　最低みんな6〜7役くらいはやってますね。ちなみに僕は、わらび座はステージで舞台をやることと、もう一つ、踊り教室をやることがわらび座の柱だと思っているんです。

**一同**　へぇ〜。

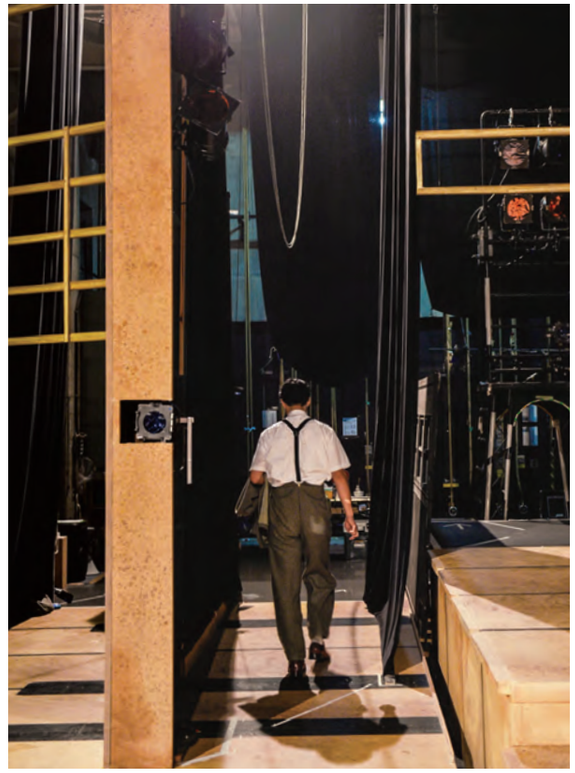
**鈴木**　毎年、何万人っていう中学生、高校生が修学旅行で来て、ステージを観て踊り教室をやるっていうのがセットになっていて。終演後に出ていた役者がそのままインストラクターになるんです。

**鍵岡**　すげ〜！

**鈴木**　2時間弱練習をして、最後にステージで発表会をやるんです。

**矢吹**　最高ですね。

**鈴木**　これがね、本当にいい仕事で。都会の学校からクラス全員が飛び出して、いつもと違う土地でいつもと違う体験をすることで、友だちの普段は見えなかった部分が見えてきたり、それぞれ人の見方が一気に変わっていくのがすごいんですよ。



**一同**　へえ〜〜〜。

**鈴木**　わらび座の人間の力を借りて、子どもたちが目に見えて変わっていくんですよね。声がどんどん出てくるようになって、他のクラスを応援したり。

**一同**　うんうん。

**鈴木**　わらび座は、そういう仕事を30年以上やっていて、舞台ももちろんですけど、ここに来て子どもたちが変わる、そういう場を作るっていうのも大きなことなんです。

**藤本**　それを目の当たりにできるんだもんね。

**矢吹**　先生より先生みたいですね。

**藤本**　結局、先生じゃんみたいな。

**一同**　（笑）。

**鈴木**　そういえば先日地元の小学校の学習発表会の劇に出てきたんですよ。

**一同**　え〜！

**鈴木**　最初は6年生の劇の指導をしてくださいって頼まれたんですけど、その脚本がすごく良くて「出してくれませんか？」って。

**一同**　へぇ〜〜。

**藤本**　そういうふうに、学校に行って教えるってことも結構あるんですか？

**鈴木**　ありますね。地元で講演したり。こないだは、為三さんの地元の米内沢（よないざわ）小学校に呼ばれて行ってきました。

**藤本**　そうかー。今回の「為三さん！」も、ある種、秋田いいでしょ？　素晴らしいでしょ？　っていう地元の人たちに向けた秋田礼賛の物語のようだけど、実は県外の僕が見たときに、そう見えないのがすごい。つまり、僕にとっては神戸だったり、それぞれの地元への思いにきちんと落ちてくる。

**鈴木**　そうですね。

**藤本**　そういうところに、わらび座の使命みたいなものを感じるんです。鈴木くんはいま10年わらび座にいて、今後ってどういうふうに考えているんですか？

**鈴木**　今年が「為三さん！」で、去年は平賀源内（ひらがげんない）の作品で、小田野直武（おだのなおたけ）っていう秋田出身の絵師の役をやって、その前はジブリの「おもひでぽろぽろ」で山形の農業青年のトシオって役をやって。ここ3年ぐらいずっと地元、東北の人物の役をやっているんですけど、演出家のかたは大抵東京から来られるので、自分がネイティブの秋田弁を喋れるってことがこんなにも武器になるんだってことをあらためて感じさせてもらったんです。ここにいる人たちだけとやっていると気づかないんですよ。でも、偉い先生が来て、それを「良い」ってひっぱりあげてくれる。方言ってこんなに力があるんだって。わらび座はツアー公演もたくさんやってますけど、やっぱり僕はここにいて、この間やった学習発表会のように、地域と劇場っていうのを結んで、人と人の繋がりを作っていくのが、外から来た人間ではなくてここで生まれ育った人間としての自分の役割だと思うんです。地元では僕のことを孫だったり息子のように思ってくれている人がたくさんいて……。その人たちが「おらだの（自分たちの）鈴木裕樹だ」って。それがもっと秋田県内へと広がって「おらだのわらび劇場だ」って、そういうふうに思ってくださる人をどんどん増やしていきたいって思っているんです。

**一同**　うん。

**鈴木**　やっぱり、首都圏でやっているわけじゃないですから。ただ、そこでやっているものは全国で勝負できるレベルの高いものでなくちゃいけない。

**藤本**　いやぁ、本当に未来の形だ。さまざまな地方でわらび座のようなものが生まれればいいなあ。

**鈴木**　うん。そうですね。

**藤本**　いやぁ「為三さん！」は本当にロングランすべきお芝居だよ。僕が観てきたこれまでのミュージカルって、ブロードウェイに憧れた人たちが、あっちのものを持ってきてやる。もしくは、こっちで作るんだけど、あっちみたいなものを作るっていうものばかりで、それはそれでとても楽しいんだけど、本当にその土地のもの、この地面から掘りだしたようなミュージカルが生まれているっていう気がしてワクワクしたなあ。

**鈴木**　農作業がひと段落して観に来て、「観ている間、膝とか腰の痛みを忘れて楽しむことができました」って。僕は、そういう人たちにこそ観てもらいたい。そういう劇場の在り方でいたいなって思いますね。

**藤本**　うん、すごい。それはこれからのやり方っていうか生き方だと思うし。それをわらび座は見せてくれている気がします。そんななかで鈴木くんのような看板役者が、それを思って演じているってことがわかって、本当に良かったです。なかなかの32歳だね〜。未来あるね〜。すごいな秋田。

**一同**　ははは。

# 第2章 わらび座の使命

ミュージカル「為三さん！」を実際に観劇したのんびりチーム。取材冒頭にして鈴木裕樹というおらだのスターに惚れ込んでしまいました。そこで次にお話を伺ったのは、わらび座社長の山川龍巳さん。インタビューが続きますが、妙な年表を書き記すことよりも、ここでぜひ、そもそもわらび座とはなんなのか？　を山川さんの言葉から感じてもらえたらと思います。

## わらび座取締役社長 山川龍巳さん 63歳



**藤本**　あらためて、「為三さん！」を観させてもらいまして。

**山川さん（以下敬称略）**　藤本さん以外は全員秋田ですか？

**藤本**　半分くらいですね。でも秋田メンバーの反応がおもしろくて。県外の人間からすると、当然秋田のメンバーは何回かわらび座の公演を観ているもんだと思っていたら、みんな、ほぼはじめてで。

**山川**　こういう意識的な人たちがやっと観始めてくれるようになってきたという、珍しい現象なんですね。

**藤本**　そうか～。いま、そういう状況なんですね。

**山川**　要するにわらび座ってのはね、全国公演でずいぶんと推しだしていき、そのことをわかっている人はわかっているわけだけど、やっぱり秋田の人たちのなかでは田沢湖のものだという印象が強いんですね。

**矢吹**　そうかもしれないです。

**山川**　だから秋田市「エリアなかいち」のにぎわい交流館でわらび座の舞台をやれるっていうのは非常に重要なきっかけになるんじゃないでしょうかね。

**矢吹**　明後日拝見しようと思っています。「政吉（まさきち）とフジタ」。

**山川**　それは。ぜひ。

**藤本**　聞きたいことが山ほどありすぎて、何からと思うんですけど……。

**山川**　ええ、ええ。

**藤本**　いまお話いただいたことでいうと、それこそ「なかいち」っていう場所も、せっかくああいう立派なものができたのに、次から次へテナントが入れ替わって正直うまく人が流れていない。だけどああいう場所にエンターテイメントが入っていくことで動く空気みたいなものがやっぱりあるんだろうなぁと。

**山川**　うん。ありますね。やっぱり、時代の変化がそういうことを求めてきているんでしょうね。

**藤本**　わらび座っていうものの使命じゃないですけど、愛媛の「坊っちゃん劇場」のこととか、町に新しい風を吹き込ませていく。そこにエンターテイメントの力を使っていく、そういうこ



とが求められる時代になってきたっていうことなんですかね？

坊っちゃん劇場…「地域文化の発信」をコンセプトに2006年にオープンした劇場。上演作品の制作、出演をわらび座が。ちなみに初代劇場支配人が山川さん。

**山川**　そうですね。だってやっぱり、豊かな時代ですよね。経済問題だなんだって言ったって。そんななかで、いつの時代でも、その時代に最も欠けているものに、若い人たちが一番敏感だって言われてますよね。

**藤本**　なるほど。

**山川**　要するに僕らの世代って、いまの若者はなんか意欲がないとか、若さがないな〜って、つい言いがちだけど、そうではなくて、僕らのときは例えば貧しさから脱皮するなんていうことが非常に重要なテーマだったんで、車が欲しいとかさ、本当にそういうことだったの。

**藤本**　はい、はい。

**山川**　車があったらデートもちゃんとうまくいくだろうな、みたいな（笑）。

**一同**　（笑）。

**山川**　いまの子たちは、僕らから言えば非常に恵まれた状況のなかで、何かが欠けている、何か飢餓感がある、何か内面で充実感がない、虚しい。そういうことだと思うんですよ。だからそういうところに刺激を与えていくってことは、重要な仕事じゃないですかね。

**藤本**　まさに。

**一同**　はぁ〜。

**山川**　根っこを持っている強さ。これは本当に、素晴らしいことだったんだね。

**藤本**　創始時のメンバーのかたは、こういう未来を想像してたんですかね？

**山川**　少なくとも問題意識の部分ははっきりしてたでしょうね。

**藤本**　問題意識とは？

**山川**　それはね、アクセサリーとしての文化ではなく、生活必需品としての歌や踊りを追究する。わらび座を創った原太郎（はら）は、日本は松の木に竹をついだようだと言ったんだよね。ヨーロッパの音楽、クラシック音楽にしても、そのベースになっているのは民衆の歌や踊り、生産活動から生みだされた歌が基本的なベースになって、そういうのがよ〜く吸収されて、国民音楽を作り上げている。でも日本はそういうことができていない。それをするのは、東京ではだめだよなぁという話で。

**藤本**　なるほど。

**山川**　で、やっぱり農民の人たちの歌や踊りに学ぶっていうのはとても重要なことなんですよ。秋田のなかでもここらへんは民族芸能の宝庫だから。わらび座に入るとね、「なぜ東北は民族芸能の宝庫なんですか？」という授業から始まるんだね。

**一同**　へ〜。

**山川**　『のんびり』を読んでたらそういうのがよくわかるものね。そういう問題意識で取材をしているなという気がするんだよね。

**藤本**　そう言っていただけると光栄です。たまたま石川理紀之助を僕たちが特集したと思ったら、ちょうど理紀之助さんの舞台があり。

**山川**　ええ。

**藤本**　次は成田為三さんだ〜といったら「為三さん！」があるとか。偶然のリンクがあるなかで、今日もあらためて観たときに、いままさに山川さんがおっしゃった、いまを生きている若い人たちが求めているもの、渇望しているものっていうのは物質というより心のほうで、そういうものなんだよっていうことを「為三さん！」の舞台は言っているじゃないですか。

**山川**　そうそう。

**藤本**　そういう題材選びはどういうふうに決まっているんだろうと。

**山川**　一番はね、営業活動を担当する人たちは、社会の情報を最初にキャッチするアンテナの役割をしてるんですね。

**一同**　うんうん。

**山川**　でね、そこにプラスして、この作品を取り上げることによっていまの時代の何を突き破っていくんだろうかっていう、これが重要なんですよ。要するに今度の舞台だって、成田為三さんを表現することで、何かを突破しなきゃいけない。

**藤本**　なるほど。

**山川**　そういうことをみんなで議論していくなかで、3年分くらい作品のラインナップを作っとかんといかんねと。と同時に、大事なのはそれに見合ったマーケットを作らないといけないでしょ。いまね、わらび座が少なくとも60年、秋田の地で続いている。

**藤本**　60年！

**山川**　わらび座が東京にいたら空中分解した可能性はあるね。

1951年 東京でわらび座の前身が誕生。1953年 秋田県田沢湖町（現仙北市）に移転の際に「黄に紅に花は咲かねどわらびは根っ子を誇るもの」という精神をもとに、わらび座と名称を改めた。1971年には株式会社化。60年以上この地で活動を続ける。















**山川**　民族芸術研究所っていう優れものの研究機関がうちにはあってね。僕は九州の長崎の出身なんで「雪がたくさん降るっていうのは大変ですよね。冬の間、何もすることがないから歌でも歌わないと、寂しくてたまらないんじゃないですか」みたいなことを言うわけ。大概、みんなそういうことを言うんです。すると研究所の所員がね「部分としては間違っていないんだけど、大事な何かが欠けているんだよね」って言うわけ。そこからね、米作りの歴史の勉強に入っていく。

**藤本**　は〜。

**山川**　かつて東北は米を作っていなかったんですよね。寒い日があり暑い日があり、雨が降らない日があり、日照りの日があり。そういういろんな気候条件に耐えられるように、いろんな種類のものを作りなさいっていうのが基本なんだよね。でも幕藩体制のときに東北は米作りをある意味強制させられてますよね。米を税金の対象として作らせる。だから、気候状況が悪いときには大変な餓死者が出た。そういうなかで農民たちが作った歌や踊りは、要するに余暇とか余裕でできてるとは言い難いんですよ。貧しくて飢え死にから解放されるために、豊作を願う歌や踊りが生まれた。

**藤本**　はい。

**山川**　毎年毎年、米がたくさん実るようなところだったら、お祝いの歌なんか歌う必要ない。雨が降らなければ天の神様にお祈りして「雨よ降ってくれ」って懸命に雨乞いの太鼓を叩くわけ。研究所の人はそういう歴史を語り、僕らにも調べさせたりしながら、最後にこういうまとめ方をしたんだよね。「貧しかったは貧しかったし、寒かったは寒かった。だけど、そういうなかで生きるということを最も考えたところほど、歌や踊りが多い」っていうんだよね。

**一同**　はぁ〜。

**山川**　すごいことを言うなと思ったね。生きるっていうことを真剣に考えたところほど歌や踊りが多い。そういうことをベースにして、新しい日本の民族の芸術ができるといいねと。そのために農村に住もうと。多分、頭の中だけで考えたんじゃダメなんだよね。だから、最初に9名の若者がここに来たときは、今日から泊めてくださいって農家の人に言うんだよね。僕らが若い頃にはそういうことを話してくれる先輩がたくさんいた。そのとき驚きはしたんだけど、何か、とても情熱を感じたというかね。

**藤本**　本当ですね。

**山川**　最初に持った家は、農家の人が提供してくれた材木小屋。そこから始まったから。

**藤本**　ふ〜〜ん。

**山川**　生存するっていうことだけで言えば、文化や芸術っていうのは意味のないものかもしれないけど、人間らしく生きようなんて言ったとたんにさ、必要になるよね。そういうことを考えていくために伝統的な深さのなかからそのDNAを学んでいこうというのが出発点であり、いまでもそれは変わらない。ただ、大事なことは「為三さん！」なんかもね、そういう努力のもと、伝統をとても大事にしているんだけど、伝統一般が大事だとは思っていないんです。保存会の人がやればいいし。それはとても大事な仕事なんですよ。だけど僕らがやらきゃいけないのは、伝統一般よりも、いまを生きることであり、未来を生きることだから。だから「生きる」ということを励ます舞台創造をするうえで、伝統の何が役に立つのかっていうのは、眼力が要るね。

**藤本**　うん。そうですね。

**山川**　それは、いまの時代を深く誠実に生きようと思わないと見れないんだね。見抜けない。それは『のんびり』の仕事でも一番大事にしているセンスですよね。大切なことはね「何がいま大事なんだろうね」っていうことを討論できるバカたちなんだよね。

**藤本**　確かに。眼力とか嗅覚とかで感じているものって、この人が未来のことを考えているんだろうか？　っていうもはやその一点かもしれない。やっぱりわらび座って、未来をどうしていくか？　ってことを考えている。

**山川**　ええ。

**藤本**　そもそも山川さんはわらび座に、役者を志望して入られたんですか？

**山川**　それはね、18、19の頃ね、もう、生き方に迷っていたというか、悶々としてたっていうかね。「お前、何したいの？」って言われてもわからないんだよね。僕は（長崎県）波佐見（はさみ）っていう町なんだけど。隣が佐世保だからアメリカの文化にめちゃくちゃ影響されて育ってきたの。子どもの頃に、アメリカ人に生まれたかったな〜と思ったもんね。豊かさに圧倒されてたから。だって、着ているものが違う、なめているアイスクリームが違うんだもん。

**一同**　う〜ん。

**山川**　アメリカンスクールに通っている女の子なんかね、めちゃくちゃキレイで。ハーフの子なんかも日本語喋れるんだろうかと思うような顔つきしているんだよ。それが「よかと？」なんか喋っていると、もう。

**一同**　ははは。

**山川**　それで、ある人が、わらび座を観に行ったらおもしろいよ〜って勧めてまったから。



てくれたんだけど、チラシを見たら、当時は完全に民族芸能だったんだわ。

**一同**　うん。

**山川**　どっちかというと、そういうところから離れたいと思っていたというか、興味がないわけだから、何回か断るんだけどさ。そのうちさ、何かをこの人は伝えようとしているんだなってわかるわけだよね。それでね、観たので、……泣いたね〜。

**藤本**　う〜ん。

**山川**　輝いているんだもん、人間が。キラッキラ光っているんだわ。ああ、この人たちと生きたら、人生の意味がわかるかな〜と思ったな。そのまま、宿についていった。

**一同**　へぇ〜。

**矢吹**　どんなことがステージでは？

**山川**　民族舞踊だから、あのときは白鷺の舞とかだね。鬼剣舞もあった。八木節から始まって、越中おわら節があった。……素敵な人たちだなぁと思ったね。



**一同**　う〜ん。

**山川**　だから役者になろうなんて思ってもみなかった。この人たちと生きたら人生の意味がわかるかなぁと。だから僕は、わらび座の仕事をしていて思うのはね、つまずいたり悩んだりしているとき、舞台芸術の力で、僕は救われたんだね。ああ、こういう人たちを救うためにこの仕事はあるんだなって身体でわかった。だから頑張れているんだろうなあって思う。舞台芸術だとか、文化や芸術って言葉は使うことによって、とてもハイカラでインテリジェンスな感じがするけど、結局秋田にわらび座が入り、農村の人たちがこういうことを生きる糧にしてきたっていうことは、僕の体験したようなことの何十倍もすごい歴史を生きてきたからじゃないかなぁと。



**藤本**　舞台ってそういうものなんですね。

**山川**　そうだね。それともう一つはね、生活必需品としての歌や踊りっていうのは、舞台芸術を鑑賞するっていう範囲にとどめておいてはだめなんだわ。実はわらび座っていうのは、歌や踊り、民族芸能や太鼓、笛なんかは得意だったから、本当に素晴らしい舞台だったのね。ところが、お芝居はすごい下手くそだったの。

**一同**　へぇ〜。

**山川**　30年くらいかけてね、ようやくいまでは東京でもいないような役者が出てきましたねって言われるようになってきたんだけど。寺尾聰さんのお父さんの宇野重吉さんって役者と、わらび座を創った原太郎はすっごい仲が良かったのね。

**一同**　へぇ〜。

**山川**　それで宇野さんがね、わらび座の連中にお芝居の訓練をしたの。原太郎が頼んだんだろうね。練習場に誰か役者をよこしてくれないかって。そのときに、米倉斉加年っていう人が来たのよ。僕らが若い頃、30年くらい前だよね。それでね、民話の練習をしてね。稽古場に役者80人くらい集められて総括が始まるの。まとめの会。そこで40歳くらいの役者に向かってね、「君の演技、とても良かったですよ」と褒めたのよ、一言。言ったんだけど、すぐね「いま、僕は本当のことを言ったと思いますか？」って言うわけですよ。



**一同**　えぇ〜!!

**藤本**　恐ろしい（笑）。

**山川**　もうみんなね、凍り付いた（笑）。それでね、「言葉っていうのは、嘘をつくんですよ」って言ったね。だけど人間っていうのは、嘘をついているときの目、呼吸とかにもどっかに嘘があってね、裏切れないようにできているって言うんだよね。人間の生理は。あなたの演技は、そういう人間の生理をよく理解しないままやっている、形だけなんだと。上っ面、形だけをやっているんですよって一生懸命言っているわけだよね。世の中の人は役者っていうのを、大きな声が出せて、口角が上がって、そういう訓練をしていると思っている。要するに、喋るために必要な訓練をしているのが役者だと思われているんですよと。だけど、私が先生から言われて、いまでも一番大事にしていることは、喋ることよりも聴く力が数倍もすごいことですと。聴けなきゃだめなんですと。でね、米倉さんは「相手がセリフに込めた思いを聴き取れるかどうか、相手が嘘をついても、その嘘のからくりを見破れ」と言ったね。



**一同**　う〜ん。

**山川**　こういう話をしたら、ある公認会計士の先生が、「山川さん、演劇訓練を使って社員教育のプログラムってできないですか？」って。

**一同**　う〜〜ん。

**山川**　17時間分作ったよ。

**一同**　へぇ〜〜〜〜！

**藤本**　のんびりチームも受けた方がいいかもな〜。

**山川**　演劇手法ってめちゃくちゃ力がある。

**藤本**　おもしろいな〜。

**山川**　だから、みなさんのように、志を持っている人とこれからパートナーシップをとってね。新しい秋田をさぁ作るぞ！　って思ってるんです。

**藤本**　うんうん。

**山川**　人口は減っていく。

**藤本**　うん。

**山川**　でも構いません。

**藤本**　うん！

**山川**　一人でも輝く人間を作っていけば、そこに人が集まるはずです。

**藤本**　う〜ん！　いや〜、ありがとうございます！　ほんと楽しかったです。

**山川**　こちらこそ。

**一同**　ありがとうございました！




# 第3章 民族芸能を体感する。





## のんびり中学

鈴木裕樹くんと山川社長のお話に、いまを生きるチカラのようなものをいただいた気持ちになった僕たちは、あきらかに気持ちが高揚していました。そんな僕たちが次に向かったのは、第一稽古場と呼ばれる建物でした。実は、今回の取材にあたってあらかじめお願いしていたことの一つに、鈴木くんの話にも出ていた修学旅行生のための踊り教室があります。中学生たちがニューソーラン節を教わり、最後にその発表会をするという一連のメニューを、のんびりチームもチャレンジしたいと、広報の管野さんにお願いをしていたのです。年季の入った趣ある稽古場に足を踏み入れると、今回先生をしてくれるかわいらしい女性が一人。みーちゃん、こと、川井田南（かわいだ）さんが待っていました。

「のんびり中学校のみなさんこんにちは！」「……こんにちはー！」突然のんびり中学という設定をわずか数秒で飲み込むのんびりチーム。「今日は一緒に楽しくニューソーラン節を踊りたいと思います。私は今日、みんなのインストラクターを務める川井田南、みーちゃんと呼んでください！」すっかりスイッチを入れ替えたのんびりメンバーはもちろん元気に「はーい！」。そこからみっちり40分、20〜40歳代で構成された、えせ中学生たちのニューソーラン節特訓がスタートします。あまりに身体が言うことを聞かないものだから、それがもうおかしくて、余計に楽しくなるのんびりチーム。汗だくになりながらもなんとか笑顔と大声をキープして、みーちゃんに食らい付きます。そうしてひと通りニューソーラン節を踊り切ったところで、広報の管野さんが再び登場。間髪入れずに、僕たちのうろ覚えニューソーラン節発表会が始まりました。

（そんな僕たちのグダグダニューソーラン節を見てみたいという希有なかたは上記URLで。）

いつのまにやら、勢いでごまかすことだけは得意になっているのんびりチーム。なんとかかんとか最後まで踊り切ったところで、優しさ以外の何ものでもない管野さんの拍手をいただいて無事ニューソーラン節体験終了。さすがにみんなヘトヘトに（笑）。







http://non-biri.net/information/info/293/

## 田沢湖ビール！

しかし、取材初日にして、鈴木くんと山川さんに最高なお話を聞けて、テンションがあがった僕たちはこんなことではへこたれません。しかも今日の宿泊は敷地内にある温泉ゆぽぽのホテル棟！　早速チェックインを済ませて、みんな大好き、温泉へまっしぐら。しっかり汗を流した後は、もちろん腹ごしらえという完璧コース。温泉ゆぽぽの食事処「ばっきゃ」へ移動し、今日は最高にビールがうめえぞ〜と思っていたら、なみなみとビールが注がれた大きなピッチャーがドーン！　え？　まだ誰も頼んでないよね？　と戸惑っていると、店員さんが「社長の山川からの差し入れです」うわぁ〜〜〜っ!!!　昼間は取材中だからと、さすがに我慢していた田沢湖ビール。ただでさえあがり気味なテンションはさらにMAX！　遠慮なくいただき、みんなで乾杯——っ！



初日にして打ち上げのような空気ながら、忘れちゃいけない明日からのスケジュール。しかも明朝は表紙撮影という大仕事が待っています。お客さんを巻き込んでの撮影のため、ちょいと真剣に段取りを再確認。その上で、撮影後の予定についてみんなでアイデアを出し合います。しかし、良い取材のときはみんなの気持ちが自然と一つになるもので、意外にもすんなり決まる明日の予定。とはいえ、ここから広報の管野さんを通して相談してもらわなければいけないゆえに、現実にその通り動けるかは別として、希望は二つ。まずは、山川さんのお話で気になっていた民族芸術研究所を見せてもらうこと。これに関してはなんとかなりそうな気がしたのですが、もう一つが難題。それは、鈴木裕樹くんに演劇のワークショップをしてもらうということでした。これぱっかりは鈴木くんの都合と気持ちの問題のため、明朝の表紙撮影後に直談判してみるしかありません。ということでいまは考えても仕方がない！　と、再び温泉へGO！

## 9月28日

朝10時。表紙撮影に参加いただけるみなさんと一緒に、僕にとっては3回目の「為三さん！」観劇。そして終演後そのまま表紙撮影を行います。協力してくれた小学校の子どもたちも頑張ってくれて、予定通り13時半には撮影終了。舞台から撮影までしっかりお付き合いいただいた役者のみなさんも「お疲れ様でした～」とそれぞれ帰ろうとするなか、僕は大慌てで鈴木くんに声をかけます。







**藤本**　鈴木くん、ごめんなさい！　ちょっと相談したいことが。

**鈴木**　はい、なんでしょう。

**藤本**　鈴木くんが学校に講演に行ったりするっていうのは、話すだけじゃなくてワークショップをやることもあるんだよね？

**鈴木**　ありますね。

**藤本**　昨日、僕たち、山川さんに演劇の手法を活かした研修プログラムの話を聞いたりして、自分たちもそういう演劇のワークショップを体験してみたいなあと思ったんです。でね、そういうのをやってもらえないかなと思って……。それこそ今日とか……。

**鈴木**　今日、大丈夫ですよ。

**藤本**　ええ!?　鈴木くんやってくれるんですか？

**鈴木**　はい。僕が。時間ありますので。

**藤本**　やったあ！　でも何をやるかですね～。

**鈴木**　ちょっと考えてもらって。時間と場所はどうするといいかなあ？　場所は空いてる稽古場を使いましょう。時間は……16時くらいからなら。僕も、やるとなったら準備が必要なので。

**一同**　おお～～!!

**藤本**　やった！

**鈴木**　いやぁ～そうですか。楽しみですね。

**一同**　怖～い！（笑）。

**藤本**　悪い顔してる（笑）。

**鈴木**　こういうの大好きなんですよ。

**一同**　（笑）。

なんだかこちらで持ちかけたものの、あまりに簡単に引き受けてくれるものだから、なんだか少し怖くなってきました（笑）。とはいえ約束を取り付けられた



## 小田島清朗さん　65歳

ことでひと安心した僕たちは、さっと昼食を済ませ、民族芸術研究所へと向かいます。朝一番に広報の管野さんが手配してくださり、研究所所長の小田島清朗（せいろう）さんというかたにお話を伺えることに。そしてこの小田島さんの取材から、僕たちはまた一つ、わらび座の深淵（しんえん）に触れることとなります。

**小田島さん（以下敬称略）**　ここは民族芸術研究所と言いまして、できて46年ぐらいになります。わらび座って64年前に東京で生まれて。それでわざわざ秋田にやってきたんですけども。それはなぜかといいますと、東北には民族芸能が豊富にあると。そういうのを芸術の素材にして世界に発信できるようなものにしていきたいという、壮大な理想を持ってやってきたんです。それで、実際に来てみたら予想以上にいっぱいあるし、しかも質がとても高いわけですね。

**藤本**　へー。

**小田島**　この近辺のおじさん、おばさんたちが、ちょっと一杯飲むと、ほんとに手踊りやったり、お囃子やったり。もう70、80になってもとても色っぽい踊りを踊ったりとか。

**一同**　へえ～～。

**小田島**　その他、神楽だとか獅子踊りとか、いろいろと芸能もやるわけですするとお客さんが飽きちゃう。なので舞台用に再構成すると。

**藤本**　は～～！

**小田島**　でも、そのときにいいとこだけ、つまみ食いのようにして構成するのはまずいだろうと。どういう人たちがどういう気持ちを込めて歌って踊ってきたのか。そこをできるだけ探っていかなくちゃいけないと。地域の歴史やら、民族的な物の考え方から、その芸能の勘所といいますか、何が一番のテーマになってるのかを。

**藤本**　なるほど。




**小田島**　そういったことをしっかり調べて研究していくには、専門的な部署が必要だろうということで、準備期間を経て、47年前に民族芸術研究所という部署ができまして。で、文献資料をできるだけ集めると。しかも芸術、民族芸能、民謡だけでなくて、音楽、舞踊、演劇それから歴史関係ですとか、そういったものも収めていく。それから芸能の記録ですね。カセットテープですとか、ビデオが出る前は白黒の8ミリのフィルムなんかも。

**藤本**　へえーー。

**小田島**　高度経済成長の時代、1960年代後半から70年代にかけては若い人たちがどんどん都会に行っちゃって。それまでお祭りのときとかにいろいろと芸能をやってたのが潰れちゃう。やれる人がいない、ということがあちこちで起こって。これはもう、生命線に関わるということで。力を入れて、収録、記録したみたいです。

**藤本**　へ～～。

**小田島**　そういった、映像と音声の資料ですとか。後はそういったものを元にしながらさまざまな研究を行っていくということで。それで、いまから10数年前ですね。日本の歌や踊りってのがなかなか興行的に難しくなってきちゃって、このままでは倒産しちゃうぞと。それでミュージカルの路線に切り

替えていったわけです。ただもちろん「為三さん！」でも少し出てきますけど、例えば、一昨年までやってた「おもひでぽろぽろ」なんかには、山形の獅子踊りとか入れて、できるだけ、そういう地域の匂い、当時の人たちの気持ちがわかるような地域の歌だったり芸能の素材を提供すると。振り付けの人たちがその作品を参考にしながら作品に合うような創作をしていくわけです。

**藤本**　なるほど～。

**小田島**　このあたりが美術で、このへんが音楽……。あんまり読む人はいないんですけど、ベートーベンの研究とか。中心になった原太郎って人が作曲家だったもんですから、戦前からのクラシック畑の人だったんですね。

**藤本**　そうなんですね。

**小田島**　日本の民謡をそのままやるっていうんじゃなくて、西洋のクラシックの技法を駆使しながら鍛え上げていく、ということで。ですから、歌も、オペラのアリアなんかも役者さんたちは勉強して、舞台にのぞんでいくと。

**藤本**　へぇ～。

**小田島**　ミュージカルになってからじゃなくて、民謡時代から、そういうレッスンはやってたわけです。

**一同**　はあー。

**藤本**　小田島さんはこちらに来られて何年になるんですか？

**小田島**　43年ぐらいですかね。最初は研究生を1年やりまして、あまり役者さんは向かないなと、ハッキリわかって。どうしようかなと思ったときに声がかかって。

**藤本**　そもそも入ったのはどういう動機で？

**小田島**　それはもう、わらび座の公演を観て感動して。

**藤本**　へぇ～。

**小田島**　とにかく自分の1回きりの人生を充実したものにしたいと。

**藤本**　おいくつのときですか？

**小田島**　21、22のときです。

**藤本**　どこで観たんですか？

**小田島**　それは盛岡で。後、こちらにも来て。

**一同**　へぇ～。

**小田島**　目の前で鬼剣舞を踊られて、それでもう熱いものがゴー！　っと身体に伝わってきて。

**藤本**　へー!!　そうかー。

**小田島**　そんなに感動することがなかったっていうぐらいの感動で。

**藤本**　あ～～。

**小田島**　あ、どうぞこちらの方に。

**一同**　うわー。

**小田島**　ビデオですね。昭和20年代のはじめぐらいからこういうものが。お祭りですとか民族伝承館に行っては撮影をして。





**藤本**　これはすごい。

**小田島**　当時のスタッフが全国を駆け巡って。例えばこの梅尾神楽ってありますけど、これはどこの神楽かといいますと九州の宮崎県の椎葉村の、宮崎県のなかでもずーっと山奥のところのものを。ここ秋田からジープで重たい機材を積んで、ずーっと走っていって。2、3日はずっと収録して。

**藤本**　はぁーーー。

**小田島**　新潟県とか沖縄県とか。全国的に目ぼしいものを。足で、自前で行って収録してくるという。

**藤本**　すごい！

**小田島**　このほかに最近のデジタルビデオのもあります。あと、こちらはですね、民謡のカセットテープなんですね。

**藤本**　へぇ～!!

**小田島**　これはですね。ここの研究所が独自に行って、収録したものではなくって、いまから30年ほど前に、文化庁が民謡緊急調査っていうことで。生活のいろんな場で歌われてた歌をまだ生きてる間に収録しないと、もう後の祭りになっちゃうということで。各県の教育委員会に助成金を出して、ふつうの人たちのいろんな歌を調査記録をさせたんですね。それで、文化庁には全国のが集まってるわけですけど、文化庁は非公開で内部の活用にだけしか使わないと。私が行っても聴かせないと。そういうサービスはしないと。



**藤本**　なるほど、なるほど。

**小田島**　ということで個別に各県の教育委員会にお願いして。

**藤本**　それぞれに電話して!?

**小田島**　これこれでぜひうつさせてもらいたいと。勝手には使いませんと。研究者やら、民謡を歌いたい人にしか聴かせませんと一筆を。条件のもとに複製の許可が出て。それで例えばこの福岡県だったらば、福岡市に行って。県庁の近くの旅館かビジネスホテルに籠って、2台か3台のデッキでガーっとダビングして帰ってくる。

**一同**　へぇ～～！

**小田島**　県によってはなかなかOKが出ない。駄目だというようなところもあったりとか。随分苦労もしたんですけども。ない県もありますが40数県分があって、しかもこのままですと磁気テープですから劣化しちゃうんで。それを全部デジタル化しまして。文字も全部入力して。文字をクリックすれば、すぐに曲が聴けるというシステム化をして。

**藤本**　デジタル化されてるんですね。

**小田島**　やりました。

**藤本**　はあ～。

**小田島**　だからこれを聴きたいという人はここに来ないと聴けないという。ですから、これは本当に日本の宝だと思います。

**一同**　すごーい！

民族芸術研究所。僕たちの想像を遥かに超えていました。

# 第4章 奇跡の夜

## 演劇ワークショップ

民族芸術研究所、その存在の偉大さに卒倒しそうなくらい感動したのんびりチームですが、気付けば約束の16時。慌てて劇場前へと向かいます。先ほどとは違い、ラフな稽古着で現れた鈴木くんになんだかドキドキしつつ、案内されるまま稽古場へ。その途中、鈴木くん演じる為三を「タメコ！　タメコ！」とかわいがる姿が印象的な、為三の母ミツ役の古関梓紀（こせきあずき）さんと、為三の義理の姉イネ役の工藤純子さんも合流してくれました。さあ、どうなることやら！



**一同**　よろしくお願いします！

**鈴木**　そもそも僕の取り組み方として、まずはやってみる。話がきたらまず「やります」と言って、それからいろいろ考えて、ガチンコで生まれるものを楽しんだり、出会いそのものを楽しみたいなと思っているんです。なのでお話をいただいてから、何をやろうか考えたんですが、とにかく今日は僕のペースで進めさせていただきたいなと思います。

**一同**　おおーーー!!!

**鈴木**　この間、「子どもに指導してください」って言われて小学校に行ってきて。でも直前まで座って授業を受けてた子たちが、体育館に連れて来られて「前に稽古したところまでやってみよう」って言っても無理なんですよ。運動と一緒で、芝居もウォーミングアップが必要で。まずは顔とか心が大事だと思うんですね。なので、小学校でやったウォーミングアップをそのままやります。まずは、顔を不規則に目一杯動かしてみてください。

## 顔芸の神

といった感じでスタートした鈴木裕樹の演劇ワークショップ。言われるがままにウォーミングアップをするのんびりチーム。互いの顔を見ては笑い合うなか、曲に合わせて顔を自由に動かすという顔だけダンスなるメニューに突入したところで、鈴木くんの高校の2年先輩、われらがのんびりデザイナー澁谷の顔芸が爆発。テンポのある曲から、スローな為三さんの名曲『浜辺の歌』まで、澁谷の顔に神降臨。それを見てみんな大爆笑。一気にみんながリラックスします。上手下手ではなくて、とにかくやることが大切という鈴木くんの精神が一気に伝わるようです。さらに、古関さんと工藤さんも合流して、さまざまなゲームへと発展。わらび座チームを負かすようなものなら「役者を倒したぞー！」と大盛り上がりする、ほんと単純なのんびりチーム。しかしいつのまにか、全員どんどん声が出ていることに気付きます。そうやってさまざまなゲームを楽しんだあと、ここぞとばかりに鈴木くんが取り出したのは、なんと「為三さん！」の台本のコピーでした。







**鈴木**　「為三さん！」の1幕で、為三さんが文子さんにプロポーズするところをペアになってやってみませんか？

**一同**　えーーー!!!

## 奇跡のペア

「為三さん！」を観ている僕たちにとって、そのシーンがいかに大事な場面かを知っているだけに、いきなりの展開におののくのんびりチーム。言われるがままにくじを引き、その結果、絶妙な5組ができ上がりました。基本設定はあまり気にしない。自分たちの思うとおりにやってみる。多少台本を書き換えてもOK。但し稽古時間はわずか15分。そんなルールのもと、早速取り組む各ペア。しかし15分はあっという間。すぐに発表の時間です。



## 自由な演技

『浜辺の歌』を筆頭に、数々の名曲を作曲した成田為三ですが、彼の本質はドイツ留学で学んだ「対位法」という作曲技法にあります。高音のパートと低音のパートどちらかが主となる関係でなく、例えば輪唱曲のようにどちらのパートも主でありながら、二つのメロディーが調和し、一つの素晴らしい楽曲となる。成田為三が最も大切にしたその楽曲法になぞらえて一生の伴侶にプロポーズをするというとてもとても大切なシーン。な、の、に、カメラマン鍵岡演じる日本人らしからぬ為三に、淡々とした話し方がやけにホラーな服部文子。坊主の田宮為三に髭の陽馬文子など。せっかくのいいシーンが、もう個性溢れ過ぎてお腹が痛い痛い（笑）。例えば……

文子　・・いまの、プロポーズですか。
為三　はい・・僕と、調和してくれますか。
文子　では、私からも一つ質問します。
為三　なんだすべ。どうぞ。
文子　お酒、やめてくださいますか。
為三　え・・





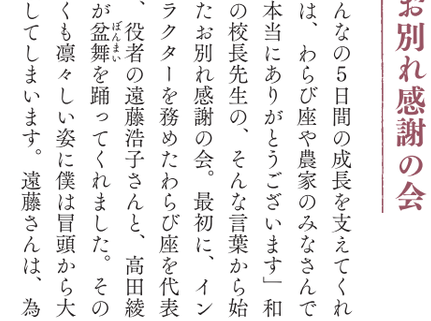
ドイツ留学中、精神的な辛さからお酒に溺れてしまった為三に、結婚の条件としてお酒をやめることを迫る文子。そんな名シーンも。

澁谷（文子）・・いまの、プロポーズですか。
浅田（為三）はい・・僕と、調和してくれますか。
澁谷（文子）では、私からも一つ質問します。
浅田（為三）なんですか。どうぞ。
澁谷（文子）タバコ、やめてくださいますか。
浅田（為三）え〜〜!!!

ヘビースモーカーな浅田くんにタバコをやめろというもはや虚実入り交じったシーンにチェンジ！　浅田くんのリアルすぎる「え〜〜!!!」が、いまだに忘れられません（笑）。

## ワークショップ終了

**鈴木**　これでメニューは終わりです。
**一同**　ありがとうございました！（拍手）
**鈴木**　こちらは何をしたっていうわけでもなく。
**古関さん（以下敬称略）**　湯水のように湧き出てきた（笑）。



**鈴木**　僕は影響を受けやすいんで、明後日からの「為三さん！」に……。
**古関**　ほんとに!?　やばい〜!!
**鈴木**　ほんと演劇って、こんなふうに楽しいものなんですね。自分たちが楽しくやってるのをお客さんが観れば楽しいですから。これが原点なんだなってあらためて思いました。つい演出家の人にいろいろ言われて小さくなっていくんですけど。僕たちも今日これを観て、自分たちの演技にも自由さを取り戻せたらと思います。ありがとうございました。
**一同**　ありがとうございました！
**鈴木**　それで、実はこの後なんですけど、僕たちの班のほとんどが関わっている、東京から来ている中学生たちの学習旅行の最終日の夜ということで、お別れ感謝の会っていうのをやっていて19時からなんですけども。中学生と、うちのインストラクターと、農家体験を引き受けてくれた地元のお父さんお母さんたちが集まるんです。そちらよければ、見ていかれませんか？
**藤本**　見たい！
**鈴木**　ここの中学生たちとは30年以上続いていて、わらび座の大事な仕事の一つで、1年に1回しかないので。
**一同**　おお〜〜！　ありがとうございます！

## 和光中（わこう）

鈴木くんたちの計らいで、偶然にも和光中学校のお別れ感謝の会を見学できることになった僕たち。ひとまずホテルのロビーで休憩しつつ取材の準備を整えます。実は『のんびり』が始まった最初の2年間共に取材を続けていた写真家の広川智基くんが、和光中学出身で、そういえばわらび座での体験について聞かせてくれていたことを思い出しました。19時になり、訪れた第一稽古場。初日に僕たちがニューソーラン節を踊った場所。しかしあのときとは違って、そこはたくさんの人で溢れていました。お邪魔しないように扉の外からそっとその光景を眺めることにします。

## お別れ感謝の会

「みんなの5日間の成長を支えてくれたのは、わらび座や農家のみなさんです。本当にありがとうございます」和光中の校長先生の、そんな言葉から始まったお別れ感謝の会。最初に、インストラクターを務めたわらび座を代表して、役者の遠藤浩子さんと、高田綾さんが盆舞（ぼんまい）を踊ってくれました。その美しくも凛々しい姿に僕は冒頭から大感激してしまいます。遠藤さんは、為三の奥さんの文子役。高田綾さんは物語のキーとなるおまつ役。そんな二人が「為三さん！」とはまったく違った姿を見せてくれたことに、僕はわらび座のまさに根っこを見せつけられたような気がしました。その後、中学生たちがそれぞれに語る、受け入れ農家のみなさんの紹介とお礼の言葉。思わず感極まって泣き出す子どもたちの姿に、偶然にも今日という日のこの時間を共有できた幸福を僕たちは噛みしめていました。


















ります。秋田のみなさんの本当の優しさ、太陽のようなあたたかさで、自分のからを破っていけたんじゃないかと感じます。本当の優しさが人を変えていくと、あらためて感じることができました。働くということについても話をしました。傍の人を楽にする。それが「はたらく」の語源だと言われています。働くということは周りを幸せにしていく。気持ち良く、楽にしていくことだ。それをこの秋田の地で学んだということを忘れないようにしてほしいと思います。農家のみなさん、生徒がお世話になりました。いま農業はいろいろな難しい問題があります。農家のみなさんの思い、心を掴み取って、賢く消費して、手を結び合う関係をずっと築いていきたいと思います。ここを新しい自分作りの出発点として、新たな自分を作ってここに帰ってきたとき、秋田のみなさんは喜んでくれると思うんです。「ありがとう」という言葉以上に、行動で見せられたらと思います。農家のみなさん、わらび座のみなさん、ありがとうございました。

泣きじゃくる子どもたちと、その背中に手をやる農家のみなさんの姿に、僕はもう涙を我慢するのをやめました。







## 涙の夜

生徒有志によるニューソーラン節をはじめとした出し物や、農家さんの出し物などを経て、今回の秋田学習旅行の実行委員長という男の子が挨拶をします。「秋田に行ったら変わると言われてきた。実際に来てみるとそのとおりで、失敗をしても批判することなくみんなで笑えるようになった。帰ってからも自分に自信が持てていたら最高の旅行だと思う。だから最高の旅行にしましょう」そんな彼の言葉から、この5日間が彼らを大きく変えたであろうことが伝わってきます。

その後も代表の子たちが順番に読みあげる作文は、本当に素晴らしいものでした。トマトが嫌いだった自分が農作業を経て食べたトマトを美味しく感じたこと。ふるさとが3つくらいあってもいいという先生の言葉に、何を言ってるんだろう？　と思っていたけど、いまはまたここに帰ってきたいと思っていること。ふるさとは東京だけじゃないんだと思ったこと。秋田弁がわからなくて戸惑いもあったけど、お母さん、おばあちゃんの優しさに触れて言葉を超えたこと。休憩しても一人作業を続け、誰よりも栗を拾っていた農家のお母さんの背中に母の偉大さを感じたこと。そうやって拾った栗で作ってくれた栗ごはんに幸せを感じたこと。働くということはそんな幸せを味わうためにあるのだと思ったこと。自分も誰かのために手を差し伸べられるような強く優しく誇り高い人になりたいと思ったこと。これら彼らの言葉には微塵の飾りもなく、それらすべてが胸の内から溢れ出てくるもので、彼らが涙を流し言葉をつまらせながら懸命に語る一言一言に、僕はもう胸がいっぱいでした。最後に彼らが歌った合唱『遥か』を聴きながら、僕はもう涙が溢れ出て仕方ありませんでした。ここで、最後に挨拶をされた学年主任の先生の言葉を紹介させてもらおうと思います。







みなさんの合唱を聴いて、言葉を聞いて、感動しました。学校とは違う笑顔、表情、いままで見たことのないような顔つきを目の当たりにしたからです。自分を変えるということは本当に難しいことです。秋田を語るとき、「北風と太陽」を思い出します。太陽は、ゆっくりとあたたかく照らして、旅人は自らコートを脱いでいきます。思春期の子どもたちが変わるのはそういうことじゃないかと思います。この世の中は北風ばかりです。圧力や管理のなかで人間を変えようとする動きが

# 第5章 僕たちにできること

## 9月29日

涙の夜から一夜明けた朝、秋田市にある秋田県立美術館前に集合した僕たちは、ちょうど展示真っ最中だった、池田修三展（『のんびり』特集をきっかけにブレイクした、いまは亡き秋田出身の木版画家）を観た流れで、お客さんが飲食代の代わりに修三さんの作品を置いて帰ったという近くの喫茶店「葡蘭馳（ぶらんち）」で少し早めのランチ&ミーティング。今日はお昼から美術館のある「エリアなかいち」という場所で上演されるわらび座の舞台「政吉とフジタ」を観劇することになっていました。

　ただわこ芸術村での濃密な2日間のなかで、わらび座の根っこを少しずつ掘り、見ては再び土をかけるような、ありがたくもそんな体験をさせてもらった僕たちは、わらび座のみなさんにいったい何が返せるだろう？　そんなことばかり考えていました。もちろん一番の恩返しは最高の誌面を作ることではありつつも、取材最終日の明日、何か直接お礼を伝える良い方法がないだろうか？　しかしその明確な答えは見つからないまま「政吉とフジタ」観劇の時間が迫ります。

## 「政吉とフジタ」

　なかいちに到着。普段はちょっとした講演ホールのようなスペースゆえ、本拠地わらび劇場に比べると小さな簡易劇場ですが、こういった小劇場公演もわらび座の大切な側面です。連日お世話になりっぱなしの、広報の管野さんにご挨拶して、早速観劇させていただくことに。藤田嗣治（つぐはる）とそのパトロンだった平野政吉。二人の出会いが生み出したフジタの大作「秋田の行事」を巡る物語を、たった4人の役者さんが力強く進めていきます。「為三さん！」とはまた違った種類の舞台にその振り幅の大きさを見つつ、主役の平野政吉を演じるわらび座のベテラン役者、安達和平（わへい）さんにお話を伺います。






## 安達和平さん 60歳

**藤本**　大所帯ですみません。

**安達さん（以下敬称略）**　僕らより多い（笑）。僕ら、スタッフ入れても7人です。

**藤本**　本当ですか？

**安達**　出演者は4人。あれ以上一人もいないんですからね。

**藤本**　4人であの舞台をっていうのが本当にすごいですよね。

**安達**　わらび劇場の3分の1ですからね。3倍のいろいろなものがかかってくる。苦にはならないですけどね。いつもこの人数でやってるんですか？

**藤本**　そうなんですよ。

**安達**　すごいね～。でもいいですね、みんなでやると。思いが一つになって。

**藤本**　そうなんです。昨日も、田沢湖の方に行かせていただいて、わらび座のみなさんこそチームプレイというか。

**安達**　そうですね。いわゆる公演ごとにグループがあって。僕らは「政吉とフジタ」班だし、「為三さん！」の方





どもたちなんかも、すごい集中力で観てくれるんですよね。

**藤本**　そうですよね。実は僕、和平さんのプロフィールを見て気になってたことがあって、「わらび座生まれ、わらび座育ち」って書いてあるじゃないですか。

**安達**　簡単な話なんですが。親父とお袋がわらび座にいたという。

**一同**　はあ～！

**藤本**　じゃあ本当に初期の、東京から秋田に来られたときのメンバーということですか？

**安達**　お袋はそうなんです。親父はもっと遅れて来たみたいですけど。

**藤本**　なるほど～。

**安達**　そうやって次々入って、結婚して子どもが生まれて。だから2世代目みたいな。僕は一番最初にわらび座で生まれた子ども。

**藤本**　じゃあ住まい自体があの村の中にあるってことですか？

**安達**　そうは言っても、いまは角館町とか……。昔は座でやってる食堂があって、そこでみんなで文字通り同じ釜の飯を。でもいまはいろいろ、ね、フリーダムだから。あの頃は金も無かったから、とにかくみんなで一緒にやるしかなかった。いまは生活形態変わってきてますから。それはそれでいいことだと思いますけどね。

**藤本**　そもそも、わらび座で生まれてそのままわらび座に、っていうことに対して違和感はなかったんですか？

**安達**　僕は入るつもりは全くなかったですよ。

**一同**　へえ～。

**安達**　芝居が好きでね。でもその頃わらび座って、民族歌舞って歌とか踊りとかが中心だったんですよ。だからいる必要ないなって（笑）。まあお芝居もやってはいたんですけどね。本格的にやりだしたのはミュージカルが始まってからで。でも踊りをやったおかげでいろんなことが身について。ミュージカルやるのにすごい役に立つ。

**矢吹**　ベースがやっぱり。

**安達**　そうですね。発声にしても、踊りの足腰にしても。

**藤本**　和平さんが、いまいらっしゃる座員のなかで一番長いんですか？

**安達**　そうですね、座歴としては僕が長いのかな。役者でいうと。研究生では、僕は17期ですからね。もう遥かかなたの（笑）。




**藤本**　いま何期になるんですか？

**安達**　1年生が58期かな。

**藤本**　58期か～！　話を戻すようですけど、もともとわらび座とは思ってなかったのに研究生になったのは？

**安達**　高校卒業したら、東京行って演劇をやろうかと思ってたんですけど、それまで、わらび座の舞台ってお客さんとしては観たことなかったのよ。子どものときに舞台稽古は見てるんだけど。それでまあ、東京に旅立つ前にわらび座の舞台観ようと思って。体育館でゴザ敷いて。お客さんたちが重箱持ってきたりなんだりしながら。で、始まったらすごいわけですよ。お客さんたちが拍手したり笑ったりね。「何だこれは？」って思ってね。それでちょっと、なんかあるかもしれないなと。これだけおじいちゃんやおばあちゃんや、本当に子どもから、いろんな人たちが喜んでるから、ちょっとやってみようかなって。ただうちの親父やお袋は入れともなんとも言わなかった。フリーダムだから（笑）。それでもまあ自分で入って。それでもうズルズルと40年。

**藤本**　じゃあ20年近く前にいまのようなミュージカルに変わったときっていうのは、気持ちとしては嬉しかったですか？

**安達**　そうですね、芝居を思いっきりやれるというか。

**藤本**　ミュージカルを作るにあたって、脚本や演出を、いわゆるよそ者がやっていうのは、最初からなんですか？

**安達**　そうですね。当初は宝塚の先生だとか、とにかくいろんなかたが。それがまた良かったんですよ。ふつうでは来てくれないような人が来てくれたり。いろんな演出家とコラボしたことで、いろんなことが身についた。作品の作り方だとか、役の深め方だとか、アドバイスの仕方が全然違うし、それがものすごいおもしろかったですね。一人の演出家でずっとやってるよりは本当に勉強になった。





**藤本**　それをおもしろいと感じられたから、いままで続けられてるんですね。人によって言うことが違うと混乱しそうな気がするんですけど。

**安達**　そういうこともあるかもしれないけど、僕はけっこう楽しんじゃう。やっぱりそれはね、自分がないとだめなんだよ。どれを自分のものにするか。そう、今年ね、研究生に授業をやったの。

**藤本**　どういう授業を？

**安達**　すごい実践的な感じ。「プロというのはこういうことを要求されますよ」と。例えば、どんなふうにしたら台詞のなかで感情が沸いてくるのか、とか。もしくは、沸かないときはどうやって台詞を叩きのめすか、とか。もうほとんど企業秘密さらけ出しちゃってるけど。

**藤本**　感情が沸かないときに、どうやってやっつけるかってすごいですね。それリアルだな～。

**安達**　そうですね。もう本当に絞り出すとかね。これ（「政吉とフジタ」）だって125回くらいあるでしょ。

**矢吹**　毎日、毎回同じテンションでやっていくってどういうことなんだろう。

**安達**　いまはもうふつうにできるというか。やっぱり経験積んできてるんでね。何回もやっていくと、いろんな意味で慣れるし、枯れてくるし。じゃあそういうときに何をしたら良いのかっていうことを、いろんなふうに考えて。やっぱり世の中に目を向ける。自分のなかではできないとか悩んでるけど、そもそもお客さんたちは何を求めて来てるのかってことをいっぱい考えていくうちに、お客さんのために舞台に立つ、そのエネルギーは無限にあるな、と。そしたらすごく楽になった。そしてお客さんや、いま世の中で起きてい

ることと舞台がどんなふうに繋がっていくんだろう、と。今日だって、戦前の話だったけど、政吉さんの、子どもたちに何か残したいという、いま生きてる人たちと共通の思いがあると思う。そのことを自分のなかで大きくしていくことによって、観に来ているお客さんたちと共感ができる。いまというものを感じて、お客さんと一緒に生きるという。そのことはものすごく大事なことだなぁと。

**藤本**　いま＝未来だと思うんですけど、わらび座に感じるのが本当にそこで。

**安達**　「平野政吉はこんな人でした」っていうただの伝記をやってもね。その人が一番思ってたことで、いま生きている子どもたちやお客さんたちと共感し合えるというのは、やっぱり楽しいよね。お互いにしゃべってはいないんだけど、舞台と客席で共通の思いを膨らませるっていうのが、僕らの仕事の本当のところだな、と思うんですよね。

**藤本**　わらび座すごいです。

**安達**　わらび座が秋田にあるということをもっとね。僕もお袋が秋田だから。半分秋田……まあもう秋田ですけどね（笑）。

**藤本**　その話もすごく興味深くて。僕はいまも兵庫県の西宮に住んでいるんですけど、実は『のんびり』を作っているメンバーは半分秋田在住で、半分が県外の人間なんです。土地の者と、よそ者が一緒になってやる。

**安達**　その方がいいと思うなぁ。全部秋田の人でやってると、ダメだと思う。わらび座だってそうだもん。いろんなところから集まって来て、融合していくっていう。



**藤本**　それこそわらび座っていうものが立ち上がったとき、東京で生まれ、秋田にやって来るってこれは完全によそ者ですよね。

**安達**　最初は大変だったと思う。昭和30年代ですから。

**藤本**　お父さんお母さんが当時感じた辛さは計り知れないです。

**安達**　疎外感というか。なんか知らないけど若者たちがやってきて、はじめは「なんだろう？」ですよ。でも民謡を習って舞台でやって、学校を回って小学生に見せたりという真実を知ったときに、支えてくれる人がいるのよ。平野政吉みたいな人が。自分の家を建てるつもりで集めていた材木を、材木小屋ごとカンパしてくれて、そこで家を建ててくれて、そこに住めと。やっぱり多くの人に支えられて。コツコツと、ちょっとでも何かに役に立つ活動をしていれば、見ている人は見ているし、支えてくれる人は支えてくれるっていうね。それが、わらび座の60数年の歴史でもあったような気がするよね。いまだって多くの人に支えられているしね。

**藤本**　それがやっぱり地元でやる強みであり、おもしろみですよね。

**安達**　あそこにああいう劇場が存在するっていうこと自体が日本のなかでは希有というか。だいたい周りに100万人ぐらいいないと、劇場は成り立たないっていいますからね。周り……10万もいないですからね（笑）。田んぼはいっぱいあるけど、稲は観にこないからねぇ（笑）。

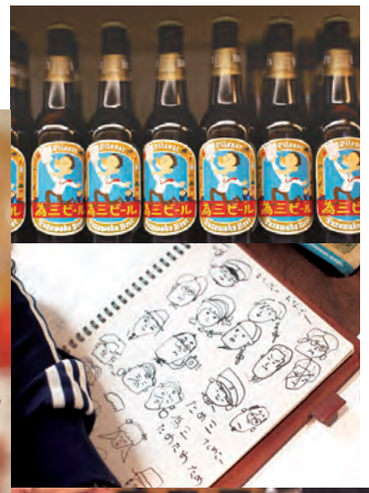
**一同**　（笑）。

## 僕たちにできること

いやあ～参りました。聞けば聞くほど、すべての人が素晴らしい。限られた誌面のなかで僕、いま、みなさんにわらび座の魅力、伝えられていますか？　ベテラン役者である和平さんの言葉に一層強い気持ちをもらった僕たちは、まっすぐのんびり事務所に戻って、あらためて3日間の取材を振り返ります。やはり僕たちのなかで、取材のきっかけでもあるミュージカル「為三さん！」を観劇できたことはとても大きなものでした。秋田という土地から、ただ秋田の未来を考えるのではなく、秋田という土地からニッポンの未来を考え表現していくことを大切にしてきた僕たちにとって、為三さん！チームと、のんびりチームは、手法は違えど同じ思いで表現をしているんじゃないか？　そう思うほどに、「為三さん！」班のみなさんに何か恩返しができないか、という気持ちが高まります。しかし、僕たちに残された時間は今夜のみ。やりたいことと、いまからできることの狭間で頭と気持ちが揺れるなか、なんとか決まったことの一つは、たざわこ芸術村内のブルワリーで造られる田沢湖ビールを活かしたプレゼントでした。

## ピッチャー返し

取材初日にとても大切なお話を伺ったうえに、その夜にはピッチャーでビールの差し入れをしてくださった山川社長。よし！　これはまさにピッチャー返しだ！　なんて適当なダジャレを出発点に、本気で田沢湖ビールについて考え始めたのんびりチーム。すでにお土産として販売されている「為三さん！ビール」を参考に、「為三さん！」班の役者さん13人分の役柄イラストを使った、新たな「為三ビール」を作ることにします。そこにそれぞれの缶バッチを付ければより喜んでもらえるのでは？　と、大慌てで秋田県庁にお願いをして、缶バッチの製作機を借りる手はずを整えます。で、肝心のイラストは、いつものごとく澁谷が担当。それをヤブちゃんがラベルなどにデザインするその間、他のメンバーは、ひたすら『秋田県民歌』を練習していました。





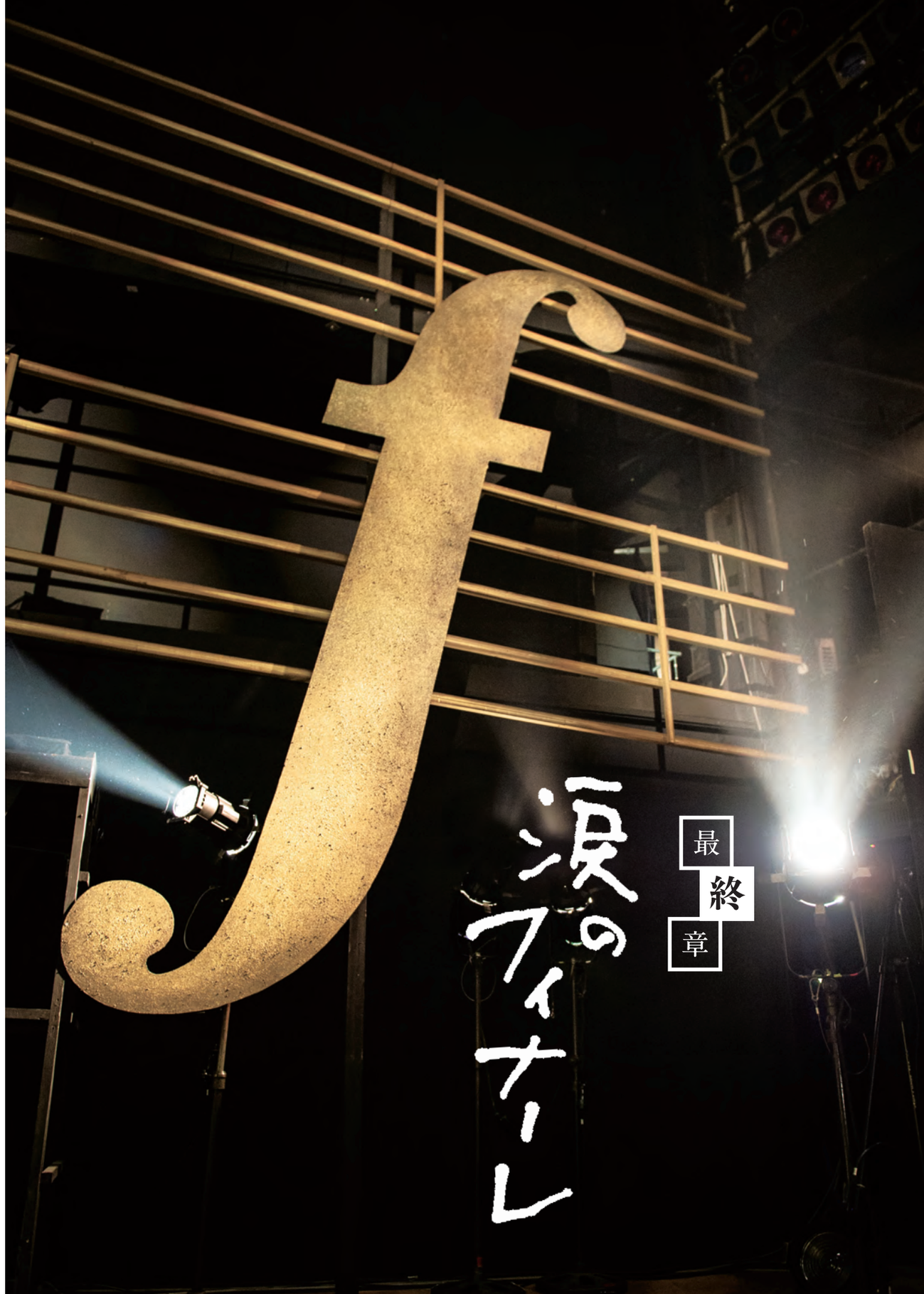






## 秋田県民歌

劇中で『秋田県民歌』を歌うシーンで、客席から一緒に大声で歌ってくれる小学生に感動したという、取材初日に聞いた鈴木裕樹くんの話を思い出した僕たちは、明日の公演中、客席から思いっきり大声で県民歌を歌おう！　と、猛特訓。それぞれいつものごとく夜中作業になだれ込み、切ったり貼ったり、缶バッチを作ったり、さらに袋に詰めたりと、いまやれることをやりきります。後は現地で仕上げるだけ！　というところまで頑張って、なんとか朝が来る前に作業が終了しました。




## 9月30日

いよいよ取材最終日。寝不足な身体をなんとか奮い立たせ、朝8時過ぎに秋田市内を出発したのんびりチームは、たざわこ芸術村へ向かう途中に、カーテンコールでプレゼントするための花を購入。10時前には到着します。そこでまず広報の管野さんに今日の僕たちの計画について相談します。

**藤本**　実は、今回のお礼ということでもないんですけど、劇中の『秋田県民歌』を歌う場面で、立ち上がって思いっきり歌いたいと思っているんです。2階からでもいいので。

**管野さん（以下敬称略）**　ぜひ。それ、何よりのプレゼントですよ。2階からと言わず1階でぜひ。

**藤本**　やった！　あと、お芝居が終わってカーテンコールのときに、演者さんに花束を渡したいんですけど、大丈夫ですか？

**管野**　大丈夫ですよ。ただ段取りがあるので、舞台監督に先に言っておきます。花束は一つですか？

**藤本**　バンフレットに載ってる13人それぞれに用意してるんです。

**管野**　ではそのタイミングは舞監と相談します。

**藤本**　ありがとうございます。あと、大したものじゃないんですけど、最後に役者さんにプレゼントを用意していて、それをお渡ししたいんです。お客さんがいなくなったタイミングでさっとお渡しするっていうのがいいですかね？　もちろんみなさん最後の衣装のままでいいので。

**管野**　じゃあ、ステージの上がいいんじゃないですか？

**一同**　嬉しいー!!

**管野**　『秋田県民歌』、歌うの良いと思います。夏にずっと公演が続いて役者さんたちも疲れてるときに、小学生が歌ってくれて、すごいエネルギーをもらったって。そういうものなんですよ。昨日、和平さんも言ってましたけど、外からのものって一番の支えなので。



**藤本**　偶然にも、年に1回の和光中学校の子たちのタイミングに立ち会えたのが本当に大きくて。

**管野**　じゃあ、お別れ感謝の会ということで。

**藤本**　はい。僕たちは彼らほど感動を与えられないと思うんですけど（笑）。でも感謝の気持ちは伝えたいなと。

**管野**　ありがとうございます。

**一同**　よろしくお願いします！

## こっそり作業

しかし本当に管野さんには頭があがりません。行き当たりばったりと言ってしまえばそれまでですが、その都度頭をフル回転させ、最善のアクションのもと取材を進めていくことを信条とする僕たちにとって、ここまで思いを汲み取って現場対応してくださる、その裏の調整は並大抵じゃないことは容易に想像できました。そんな管野さんをはじめ、裏方のみなさんの協力のもと、なんとか為三さんチームを喜ばせるのだ！　とさらに気合いが入ります。

しかし、ここはたざわこ芸術村。いつどこから、ひょっこり役者のみなさんが現れるかわかりません。準備をしているところを見られないように、車の陰に隠れて作業。実は以前、花屋さんで働いていたというカメラマンの陽馬率いる花束製作チームと、田沢湖ビールの既存ラベルを剥がして僕たちの作ったラベルに貼り替えるビール製作チームに分かれます。







## 県民歌大合唱



いやぁ～思いのほか大変なシール剥がし（笑）。せっかく貼られたシールを剥がすこと自体、なんだか心苦しい気持ちになりながら、無事予定本数製作完了！　一方の花束チームもすべて完成したところで、いつのまにかお昼も過ぎて14時15分。まずは県民歌を大合唱するべく、「為三さん！」公演中のわらび劇場へ向かいます。幕間の休憩を活かして1階の最後列に忍び込むのんびりチーム。客席から大声で『秋田県民歌』を歌うというただそれだけのことなのに、ステージに上がるかのような緊張感。そしていよいよその瞬間がやってきました。為三の旧友、倉田政嗣の「みなさん、手元の青い紙の裏側に歌詞が載っているので、一緒にお願いします！　では、いきましょう！」を合図にのんびりメンバー10人がすくっと立ち上がり、昨夜からの練習の成果を発揮するべく大熱唱！　突然最後部で立ち上がって歌う客がいるものだから、役者のみなさんびっくり（笑）。鈴木くんと一緒に演劇ワークショップを楽しんでくれた、為三の母ミツ役の古関さんにいたっては、我慢できずにニヤリと笑ってしまったりで（笑）、感動させるまではいかないものの、なんとか喜んでくれた様子で大満足。実は隣で秋田チームのヤブちゃんとイマヲ（今井）が歌いながら泣いているのを見て、僕はあらためて『秋田県民歌』のチカラを感じていました。とにかく全力で歌い切った後は、何事もなかったかのようにその場に着席。しばらく続きを観劇した後、舞台監督さんに呼ばれて今度は舞台袖へと移動します。段取りをいま一度確認し、舞台監督さんの合図のもと、さあ、カーテンコールでの花束贈呈です。



それぞれの花束に似顔絵が描かれているものだから、みなさんとても喜んでくださって、なんとか無事終演。ほっと胸を撫で下ろすのんびりチームでしたが、いろんな意味で、本番はここからでした。

**藤本**　みなさん、本当にありがとうございました。

**一同**　ありがとうございました！

**藤本**　僕たち、のんびり編集部、4日間にわたるわらび座さんの取材を今日いよいよ終えるんですけど、本当に充実した取材をさせていただきました。僕は関西から来ているので、わらび座さんのなんとなくのイメージしかなかったんですけど、「為三さん！」の舞台を観せてもらった瞬間に、いろんなイメージが吹き飛んで、「すごい！」って思いました。本当に秋田の宝だし、日本の宝だと思います。僕たちもどんどん広めていこうと頑張って本を作りますので、引き続きよろしくお願いいたします。

**一同**　お願いします！

**藤本**　僕たちから、みなさんへの気持ちとして、お花もそうなんですけど……そういえば歌もわかってもらえました？

**為三さん！メンバー**　はい!!

**一同**　やったー!!

**藤本**　実はもう一つ、みなさんにプレゼントを用意しておりまして。打ち上げとかで飲んでいただけるといいなあという、こちらです!!

（隠していた布をとる）









**為三さん！メンバー**　うわーー!!

（メンバー全員が、思わずどどっと駆け寄って近づく）

**為三さん！メンバー**　すごーーい!!

何これー!!!

**一同**　わーーーー!!!（拍手）

**藤本**　たった1日しかなくて、何をどうしようかと思って。

**片村さん（以下敬称略）**　1日で!?

**藤本**　ラベル剥がしてはこれを貼ってっていうのを、いまのいままでやってました（笑）。

僕たちの想像を超えるリアクションで、とにかく大喜びしてくれたみなさんの姿に、僕たちの方が感極まってしまって、特にデザインを頑張ったヤブちゃんは涙腺崩壊。幸福な気持ちでいっぱいのなか、突然鈴木くんがこんなことを言い出します。

**鈴木**　僕たちからも、お礼をしたいなと思いますので、男性陣……。

（男性陣が集まり耳打ちしながら相談をする）

**鈴木**　沖揚げ（音頭）。

**一同**　なになになに!?



**一同**　わーーーーー!!!!（拍手）

**藤本**　ありがとうございました！

**鈴木**　本当にわらび座がのんびりさんから取材を受けたっていうことだけにとどまらないなと思いまして。秋田を全国へっていう思いを持った二つの会社が出会って、本当に大きなものが生まれました。そういう意味で、4日間、わらび座を味わいつくしていただいてありがとうございました。そして、これからもぜひ遊びに来ていただいて、わらび座をよろしくお願いしたいと思います。では（藤本にふる）。

**藤本**　取材をしていくなかで、本当にいろんな経験をさせてもらいまして。年配のかた含めいろいろなかたに話を聞いていると、わらび座に入った動機っていうのが、踊りだったり公演を観て、本当にたまらなくなって入ったっていう声をたくさん聞いて、そのことがいま本当によくわかりました……（涙）。すごく感動しました。僕らなりに一生懸命伝えようと思いますので、4日間、本当にありがとうございました。



**一同**　ありがとうございました！

**全員**　（拍手）

**鍵岡**　藤本さんが泣いたら俺たちもダメだよ～！

**田宮**　中学生みたいだ（笑）！

それぞれに握手を交わし、別れの挨拶をするなか、あの和光中出身でわらび座に入ったという、車掌役の片村仁彦（かたむらきみひこ）くんが、こんなことを言ってくれました。

**片村**　『秋田県民歌』のとき、みんな裏で泣いてました。ありがとうございました。

僕はもう涙がなくなるんじゃないかというほど泣きました。



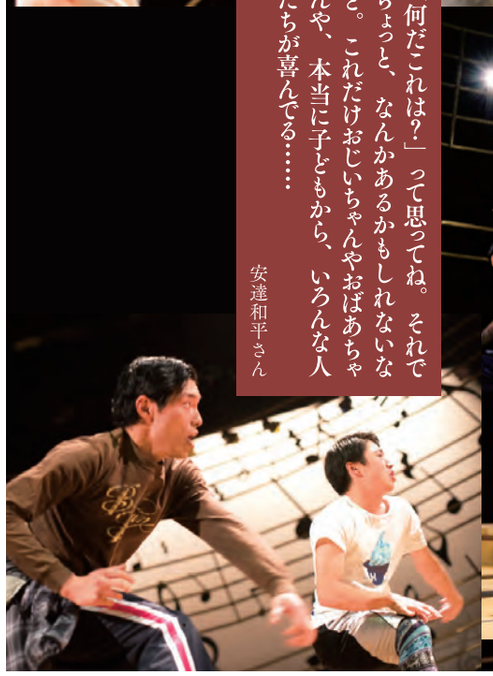


為三の友人、井上役の尾樽部（おたるべ）さんを中心に一列になるわらび座男性陣。そこから僕たちのために踊ってくれた「沖揚げ音頭」。その迫力は凄まじく、僕の頭の中でこの4日間のうちにいただいた言葉が次々とよみがえってきます。

**目の前で鬼剣舞を踊られて、それでもう熱いものがゴー！　っと身体に伝わってきて。そんなに感動することがなかったっていうぐらいの感動で……**

小田島清朗さん





**「何だこれは？」って思ってね。それでちょっと、なんかあるかもしれないなと。これだけおじいちゃんやおばあちゃんや、本当に子どもから、いろんな人たちが喜んでる……**

安達和平さん



**輝いているんだもん、人間が。キラッキラ光っているんだわ。ああ、この人たちと生きたら、人生の意味がわかるかな～と思ったな……で、……泣いたね～。**

山川龍巳さん

僕も泣きました。

「沖揚げ音頭」が終わったと思ったら、さらに古関さんが「踊らずにいられるかっ」と一言放ち、女性陣も加わり、太鼓も入れてソーラン節へ。一緒にワークショップで楽しんでくれた工藤さんの歌声に心が震えます。もしあのとき椅子に座っていなかったら僕は、間違いなくその場に崩れてしまっていたと思います。それほどの感動でした。



**今回、秋田に来てくださったのは、「つむぎや」の金子健一さんとマツーラユタカさん。木版画家、池田修三さんの出身地であり、いちじくの収穫真っ盛りのにかほ市を旅して、「ちょうどいいかんてん」を作っていただきます。**

**つむぎや**

金子健一とマツーラユタカからなるフードユニット。「食を通して、人と人とを、満ち足りたココロをつむいでいく」をモットーに、和食ベースのオリジナル料理を、雑誌、イベント、ケータリングなどで提案している。
『あっぱれ！おにぎり』（金園社）など著書多数。金子健一名義の新刊『ぱんぱかパン図鑑』(地球丸）が好評発売中。









## 「情熱のいちじく」
### ——つむぎや

池田修三さんの足跡を辿って、秋が深まりはじめたにかほ市象潟（きさかた）へ。修三さんと『のんびり』との時空を超えた運命の出会い、そのご縁の広がりに僕らも秋田に導かれたというわけです。

修三さんの作品がいっぱい飾られている茶房くにまつ、作品展開催中の象潟郷土資料館、菩提寺である蛸満寺（かんまんじ）……修三さんゆかりのさまざまな場所を巡る。お昼に寄った園食堂（その）（肉タンメンが美味！）でも、見上げると修三さんの版画が。色褪せた質感から、長い時間飾られていたことがわかる。修三さんの作品が生活の中で愛されている様子が見られてしみじみ。














# 第3回 つむぎやさんとにかほ市

Photo：船橋陽馬

**秋田のお母さんたちが作る「天使の寒天」は秋田のおもてなし料理の大定番。でも、手軽に美味しいものが手に入り味覚も変わってきているなかで、秋田の若い人たちのあいだでは作ることも、食べることも少なくなってきています。さらに県外では、秋田にこんな寒天文化があることすら知られていません。これまでの寒天文化を大切にしながらも、新しい観点で楽しめる「ちょうどいいかんてん」はないものでしょうか？ ここはもう、新たな風を送り込むしかない！ 料理家さん！　秋田に来て「ちょうどいいかんてん」作ってもらえませんか？**

天使の寒天とは？　秋田のお母さんたちは、何でも寒天で固めてしまいます。甘いものから、しょっぱいものまで、おもてなしの心で寒天を作り、さまざまなメニューを生み出しているお母さんたち。このように、寒天を使いこなす人たちは、誰もが「寒天使い」＝「寒天使」といえます。そんな寒天使たちが作った寒天を「天使の寒天」と呼んでいます。











象潟の寒天使・えっちゃんこと、竹内悦子さんのお宅を訪ねていくと、庭で採れたいちじくで作った寒天を出してくれました。庭のざくろもお土産でいただき、身近にある旬のものを使ったおもてなしに胸いっぱいに。



さらにお隣の大竹地区が、いちじくの北限の産地ということで足を伸ばしました。この地区のいちじくのまとめ役をやっている佐藤玲さんを訪ねていくと、なんとそこは佐藤勘六（かんろく）商店という酒屋さん（しかもセレクトが最高！）。敷地内に甘露煮の加工場も持つ佐藤さんは、農家さんの高齢化などに頭を悩ませながらも、いちじく産地としての誇りや地元愛を語ってくれました。

修三さんが巡り会わせてくれたのは地元を愛する人々。そのご縁を寒天に固めてみました。













# いちじくの甘酒寒天



棒寒天　1.5本
水 550ml

**A**

甘酒　500ml（佐々木麹店のもの）
ヨーグルト　200g
グラニュー糖　100g
いちじく（すりおろし）　4個分
（にかほ市大竹地区のもの）

**いちじくのざくろ風味のコンポート**

いちじく　12個（にかほ市大竹地区のもの）
ざくろ　1個（えっちゃん家からのいただきもの）
白ワイン　200ml
レモン果汁　1個分
シナモンスティック　2本
グラニュー糖　100g

**1.** 棒寒天は細かくちぎって、6時間ほどたっぷりの水（分量外）に漬けておく。





**2.** 続いていちじくのコンポートを作ります。いちじくは皮をむき、ざくろは粒を取り出す。ボウルの上にザルをのせ、ざくろの粒を入れ、木べらで潰しながら果汁を絞り出す。小鍋に残りの材料とざくろの果汁を入れ、ひと煮立ちさせたら、いちじくを入れて20分ほど弱火で煮込み、粗熱を取る。









**3.** 1の寒天をザルにあげ水気をよくきって、鍋に水とともに入れて中火で沸騰させ、寒天が溶けるまで煮る。





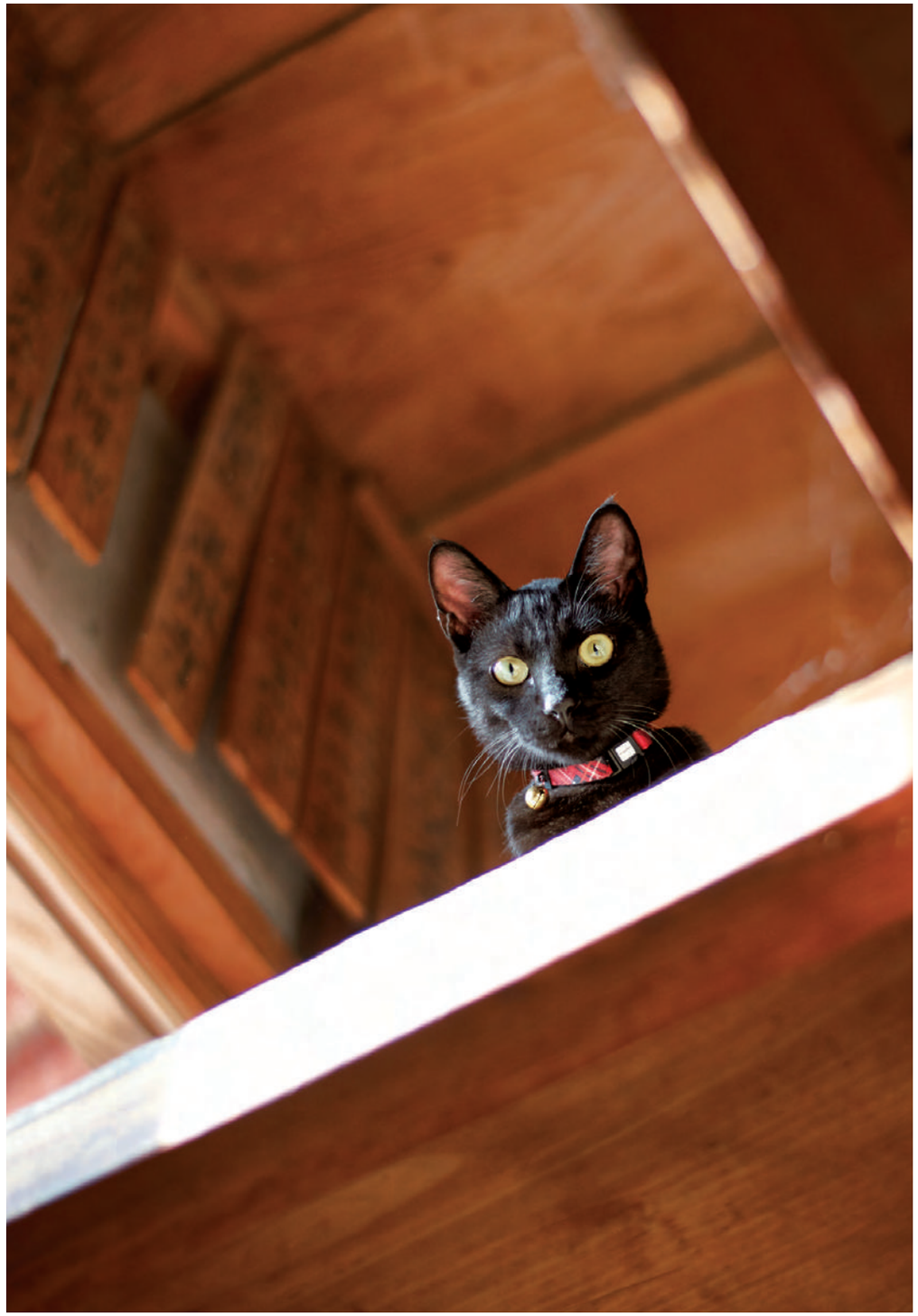






**4.** 別の鍋にAの材料を入れ、弱火でひと煮立ちさせる。

**5.** 3を漉したものに、4を加えてよく混ぜ合わせ、寒天の型に流し込む。温度がやや下がって少し固まってきたところで、2のいちじくコンポートを均等に12個並べて固める。盛りつけるときは、いちじくを縦にカットして断面を見せるようにすると美しく仕上がります。



non-biri Official Website http://non-biri.net

next issue 2016 Spring

## つむぎやの、ちょうどいいかんてん

雪景色の大地に宿る、淡い淡い小さな灯り。修三さんのパッションは儚(はかな)くもどこまでもあたたかい……木版画家、池田修三さんへのオマージュとして作った寒天です。
象潟の佐々木麹店さんの甘酒にヨーグルトを加えて作った寒天で白い冬を表現。中に入れ込んだのは大竹地区で育った北限のいちじく。竹内さんにいただいたざくろの風味を利かせたコンポート仕立てに。甘酸っぱい甘酒の寒天の中に、センチメンタルに閉じ込めました。



# 畑のキャビア!? とんぶりってなに?

秋田の食卓でよく目にする、長芋などに添えられたツブツブ。これを「とんぶり」といいます。その見た目やプチプチとした食感から「畑のキャビア」とも呼ばれる、秋田の伝統野菜で、県内ではごくごく身近なものではありますが、その生態まではみんなあまりよくわかっていません。

とんぶりっていったい、どこで、どんなふうに作られているの? そして、どうやって食べるの?

取材・文＝矢吹史子　写真＝高橋 希
Text_Fumiko Yabuki　Photo_Nozomi Takahashi

謎だらけのとんぶりの生態を確かめようと、収穫真っ盛りの10月初旬、大館市比内町にある本間均さんのとんぶり畑を訪ねました。案内してくださったのはJAあきた北の菅原力さんです。





JAあきた北
## 菅原力さん

これ、全部とんぶり畑です。とんぶりは、ホウキグサの実で、収穫してから食用に加工しています。いま、全国で食用のとんぶりを作ってるのは、この大館の比内町だけですね。でも、その農家もいまでは13軒しかありません。以前は50〜60軒あったんですけどね。高齢化と後継者不足でね。

農協で販売するようになったのは昭和44年くらいからです。それまではみんな自家用で作ってたんですが、出稼ぎ対策として農協も絡んで加工所を作って、乾燥させておいて、注文に応じてその都度加工できるようにして、冬場の収入源として奨めてきました。

書物によれば、とんぶりは室町時代からこの地域で作られていて、名前の由来は「唐のぶりこ」というのが有力なんです。唐というのは中国、ぶりこっていうのはこのへんでは魚の卵のことですよね。中国では「地膚子」といって、漢方薬なんですよ。悪酔いを防いだり、滋養強壮にも良いと言われてます。

収穫してから加工するまでが生産者が一番苦労するところです。乾燥させたものをボイルする、それから皮むき、洗浄、異物を手で取り除いて、水切り、そしてやっと3日目の朝に出荷する。

このなかで皮むきが一番大変なんですけど、じつはこれは秘伝なんですよ。先祖から「絶対に外に出すな」と言われていて。それに、この種子自体も門外不出で、品種改良もしていません。だから先祖からもらったそのまま。よそから問い合わせが来ても、絶対に外に出さない。代々継がれてきた種を守らなければならない、と。

だから生産者さんからは「もっと高い値段で売ってほしい」といつも言われています。でもそれには「これだったらお金を出しても買いたい」ってものにならないとね。

食べ方がわからないっていうのが一番の弱点。それと火には弱いんです。水の入ったカプセルのようなものだから。でも基本的には味がないので、何にでも合うんですよ。お浸しにちょっと載せるだけじゃなく、たっぷり主役として食べてもらいたいんだよね。





とんぶり生産者

# 本間均さん

僕はとんぶりを始めて4年になるかな。父がやってたんですよ、何十年も。前は手伝い程度で、真剣になったのは、父が働けなくなってから。父がやっていたころは、すごく売れていたんですよ。最高で6町歩、100メートル×600メートル。一面とんぶり畑だった。そして、当時は手植え、手刈り。だから早くに体悪くしてね。

僕は22年間、岐阜で別の仕事をして、秋田に戻ってきて11年。今は役所のバスの運転手をしながら、それ以外の時間でとんぶりをやってます。





5月に種蒔いて、6月植え付け、で、今刈り取り。だいたい5ヵ月弱だね。このなかに実が入っています。みなさんがよく目にしているとんぶりとは違うよね。これはまだ皮被ってるからね。ここから家に持って行って乾燥させて、加工所に持って行く。市販のとんぶりは加工されているものだって知らない人のほうが多いかもしれないね。

昔の人はよくもこれを食べようと思ったよね。昔はみんな近くに川があったでしょう、堰っていうのね。そこで煮て、加工して食べてたんですよね。

でも、この前の強風で実がだいぶ落ちちゃってね。風が天敵。たくさんついていたのも裸ん坊にされちゃってね。本当はまっすぐ立っている苗もこんなに倒れちゃってね。かわいそうだよね。風のいたずらでさ。毎年200キロ採れたら豊作なんだけど、今年は150キロくらいかな……。

いまは農家も少なくなったね。一番若い子で29歳。うちは子どもはギャルばっか(笑)。だから僕で終わり。やっぱり手間がかかるんだよね。最近はだいぶ機械が導入されてきて、植えるのも機械でできるんだけど、今年は手で植えました。そのほうがしっかり根付くんですよ。これだけの数を手で植えるんだから、すごいですよ。4人で数十万本。そうやって、植えるのに手間がかかるでしょ。それに雑草の処理が大変なんだ。刈り取りにも5〜6人必要だから。やっぱりこれだけ(専業)ってのはなかなか厳しい。バスの運転手しながらならできるかなって思ってやってるけど、けっこうキツイ、キツイ。本当にキツイ……。キツイなりの収入があればいいんだけど、キツイに合わないから。だからどっちかやめなきゃいけないと思ってるよ。バスもいいけど、とんぶりはやっぱりここの特産だからね。先祖がやってきた灯を消せないってことでね。僕たちがんばらねば。



# のんびり とんぶり

non-biri Ton-buri

こんなにも手間ひまかけて
作られているとんぶり。
受け継がれてきたものを守るために
私たちができるのは
まずは食べること！
ということで、
添え物役だけじゃない
とんぶりをたっぷり使った
「のんびりとんぶりメニュー」を
考えました！



## とんぶり どんぶり

あつあつご飯の上に
豆腐、とろろ芋、
ツナマヨネーズ、
柚子胡椒、そして
た〜っぷりのとんぶりを！
お醤油をかけて
具材をよーく混ぜて
召し上がれ！



## イカ とんぶり

イカの刺身に和え
ゆずの香りを利かせたら上品な一品に。
イカのほかにも
淡白な魚介によく合います。

## めんたい とんぶり

そのままだと味のない
とんぶりですが
明太子と和えると
まさにキャビアの風格に！
思わずお酒がすすみます。



## チーズ がっこ とんぶり

まろやかなクリームチーズに
たっぷりのとんぶり、
アクセントには
秋田名物いぶりがっこを
混ぜ込んでいます。
プチプチ・ポリポリの
食感が楽しい！



## とんぶり 生春巻き

ポロポロとこぼれやすい
とんぶりも
大葉、鶏のササミ、梅、
キュウリなどと一緒に
生春巻きにすれば
食べやすさもアップ！

## 航空

東京(羽田)⇔秋田　ANA/JAL … 約65分
大阪(伊丹)⇔秋田　ANA/JAL … 約80分
札幌(新千歳)⇔秋田　ANA/JAL … 約55分
名古屋(中部国際)⇔秋田　ANA … 約80分
【リムジンバス】秋田空港～秋田駅西口(約35分)
東京(羽田)⇔大館能代　ANA … 約70分
【リムジンバス】大館能代空港～大館市内(約55分)
大館能代空港～北秋田市(鷹巣)(約15分)
〈ANA〉0570-029-222 〈JAL〉0570-025-071





### 藤本流 のんびりフェリーの旅

広い秋田を存分に楽しみたい僕は、フェリーを使って車ごと秋田入りすることもしばしば。敦賀発秋田経由のフェリーは便数が少ないのが難点だけど、青い空と青い海に挟まれながらの、のんびり移動は最高の幸福!

## フェリー　新日本海フェリー

北行　敦賀(10:00)⇨新潟(22:30)⇨秋田(翌5:50)⇨苫小牧東(17:20)
南行　苫小牧東(19:30)⇨秋田(翌7:45)⇨新潟(15:30)⇨敦賀(翌5:30)

●秋田港から秋田市街へは車で約30分。
(秋田中央交通バスのご利用も可能)
〈秋田フェリーターミナル〉
018-880-2600
運航スケジュールは必ずお問合せください。



札幌
苫小牧東
仙台
新潟
東京
大阪
敦賀
名古屋

## 秋田新幹線 こまち

仙台⇔秋田
最速2時間5分
大宮⇔田沢湖
最速2時間21分
東京⇔秋田
最速3時間37分
〈JR東日本テレフォンセンター〉
050-2016-1600



### 福田流 のんびり新幹線の旅

東京から3時間半ほどで秋田まで。お弁当食べて少し寝て、盛岡で青森行との切り離し作業で目が覚めて、本でも読んでまたウトウトしてると今度は大曲でのスイッチバックで目が覚めて、そこから約30分で到着。簡単には寝かせない新幹線、それが「こまち」。額の前で手で三角を作り、コマチ! というのを流行らせたい。



## 高速バス



仙台⇔秋田　… 3時間35分(仙秋号)
東京⇔秋田　… 8時間30分(フローラ号)深夜バス
横浜⇔秋田　… 9時間40分(ドリーム秋田・横浜号)深夜バス
〈秋田中央交通(フローラ号・仙秋号)〉018-823-4890
〈JRバス東北秋田支店(ドリーム秋田・横浜号)〉018-862-9461
※秋田市以外の市町村を往復する便も複数あります。

## 自動車



仙台⇔秋田　… 約3時間30分
東京⇔秋田　… 約7時間30分
〈日本道路交通情報センター(秋田センター)〉
050-3369-6605

# non-biri akita access map





「かたくりの花」1983年

# 詩修

詩人が描く
池田修三の言葉

池田修三の版画に寄せた、
詩人たちの書き下ろし作品

10

## いがらしみきお

### そのあと

娘はそのあとどうしただろうか
かたくりの花を見つめたあとに

名残り惜しそうに立ち上がっただろうか
かたくりの花に小さく手をふっただろうか

夕暮れて薄暗くなった町を歩いて
家に帰っただろうか

その家にはおかあさんが待っていて
「おかえり」と言ってくれただろうか

娘は「かたくりの花を見てたの」と言って
「とてもきれいだったよ」と教えただろうか

おかあさんは「よかったわね」と言って
「さぁ、ごはんよ」と微笑んだだろうか

娘はうれしそうに「うん」と
うなづいただろうか

そしてかたくりの花は
真っ暗な夜の中で
まだそこに咲いているだろうか

**いがらしみきお**　1955年宮城県加美町生まれ。漫画家。仙台市在住。1979年デビュー、1983年日本漫画家協会賞、1988年講談社漫画賞、1998年小学館漫画賞、2015年文化庁メディア芸術祭優秀賞授賞。代表作の『ぼのぼの』は来年連載開始30周年を迎える。近著に『誰でもないところからの眺め』がある。

**池田 修三**　1922年秋田県にかほ市象潟町生まれ。版画家。秋田県内の高等学校美術科教諭を退職後、1955年に上京し版画に専念する。主テーマは子どもたちの情景で、晩年は風景画も手がける。作品は企業カレンダーや銀行の通帳、「広報きさかた」の表紙などにも使われる。2004年82歳で死去。

Enquête and Present

## 『のんびり』をお読みいただきありがとうございました。アンケートにご協力ください。

『のんびり』は人を基軸に「あきたのほんとう」をまっすぐ伝えるマガジンです。本号へのご感想、今後とりあげてほしいテーマなどのご要望、ご提案を、ハガキか「のんびり公式ウェブサイト」のアンケートページからお寄せください。抽選で『のんびり』オリジナルプレゼントをお贈りいたします。応募〆切は2016年1月31日（日）。当選の発表は発送をもってかえさせていただきます。

※個人情報はプレゼントをお届けするためだけに利用し、その目的以外の利用はいたしません。

**プレゼントの応募は終了いたしました**

PRESENT No.1

たざわこ芸術村　冬の小劇場公演　ミュージカル
**「どどぉ〜ん！ 大曲花火物語」ペアチケット**
公演期間：201




たざわこ芸術村小劇場にて開催のミュージカルにご招待！（チケットのお届けは2016年2月10日ごろとなります）

PRESENT No.2

**大館市比内町産 とんぶり 5袋セット**



P56に登場したプチプチ食感の秋田の伝統野菜「とんぶり」。さまざまな食べ方でお楽しみください。

のんびり公式ウェブサイト　http://non-biri.net

ハガキでご応募の場合
❶ 郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、メールアドレス
❷ 本誌の入手先　❸ 今後とりあげてほしい話題　❹ 今号でおもしろかった記事（複数回答可）
❺ ご感想　❻ 希望のプレゼント
以上をハガキに明記の上、ご応募ください。

宛先　〒010-0021 秋田市楢山登町7-14　のんびり合同会社 のんびり編集部


のんびり
15
2015.Winter
2015年12月10日発行

STAFF

編集長
藤本智士（Re:S）

編集
矢吹史子
田宮　慎
今井春佳
山口はるか（Re:S）

アートディレクション＆デザイン
堀口　努（underson）

デザイン
澁谷和之（澁谷デザイン事務所）

写真
浅田政志
鍵岡龍門
船橋陽馬
高橋　希（オジモンカメラ）

題字・イラストレーション
スダタカミツ

似顔絵
田渕志織

デザインアシスタント
小阪温視
古里凌哉

動画
近藤康洋（mel digital co,.ltd）
佐藤　努（mel digital co,.ltd）

発行
秋田県
観光文化スポーツ部観光戦略課あきたびじょん室
Tel：018-860-1073

編集
のんびり合同会社　のんびり編集部
〒010-0021　秋田市楢山登町7-14
Tel：018-832-8086
Fax：018-803-4503
Mail：info@non-biri-go-do.jp

印刷・製本
秋田活版印刷株式会社



＊乱丁・落丁誌はお取り替えいたします。
＊本誌内容の無断転記、記載、複写はご遠慮ください。
＊本誌データは2015年11月6日現在の情報です。あらかじめご了承ください。
＊本誌は「あきたびじょん」マガジン等企画制作業務委託業務で制作いたしました。
© nonbiri all rights reserved.